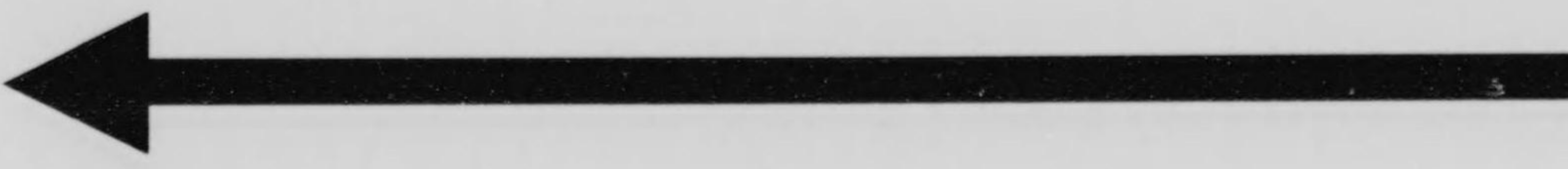


361
165



始



3-2157

361-165



阿部燾作著

株式
金泉秘錄

東京
信義堂藏版

大正
11.26
内交



金泉社蔵

序

日露大戦後株式相場は熱狂的大活躍を示し四十一年一月には七百八十圓と云ふ未曾有の大沸騰を見せその後大正三年末に至るまで久しき間一高一低の中にも下落の趨勢にて従つて株式界は不活氣の中に呻吟しつゝあつたが一昨四年新春の改まる初相場より氣勢一變して寐りより醒たる如き活氣を帯び本年に入つて益々活躍たる相場状態を辿り彼の三十九年當時の熱狂時代の色彩を帯び昨年には數年來なき新高直を顯はし何れも株式相場ならでは成功は得られない

序

一

ものとし成金熱が盛んである併し成金と言ひ致富と言ふも或は貨殖と言ふのは何れも金をして金を生ましむるのであつて金の運用其物にあるのである。相場は眞に變化百出にして到底普通の相場眼にては最後の勝利者となり捷ちを萬人より拔んづることは出来ない、株式相場の奥訣は金の運用と機會を巧みに捕捉すること即ち機の妙用である此の二者を巧みに活用し得るものは最後の榮冠を荷ふ事が出来るのである。

而して金の運用と機の妙用を發揮せんとするには又

た時運も供はねばならぬ、時運とは即ち現今の如き大々の活躍たる相場状態の時期、言ひ換れば小資本を以て大利益を得べき血戦期である。

凡そ社會にはあらゆる方面に涉りて金の運用法即ち放資の道もあれども是が最も致富成功の捷徑は株式相場を措いて他には殆んどあるまい、されど株式相場は勿論米生絲等凡そ定期と名の付く相場程六ヶ敷ものはない世にも難事中の難事と數へられて居る併し艱難と云ふ二字を負擔なす替り巧く機の妙用宜しきを得たならば絶大なる利益を贏ち得るのである、す

べて事物何事にまれ機會を巧みに捕捉せずんば到底
致富成功は覺束ない即ち機の妙用宜しきの如何にあ
る株式相場には此の機會を捕ふると言ふ事が最も至
難の業である、されば如何にして機會を捕へ如何にし
て金の運用を謀るべきやを研究せねばならぬ、本書を
公刊なす目的は即ち茲に存するのである、今や戦雲は
歐亞に蔓り古今來未曾有の大戦争は全世界の經濟界
に一大影響を與へ戦争中と戦後に涉り内外商勢は一
大革新を期せらるべき千載一遇の絶好機會たる時運
は將に眼前に横はれり世界は一面に於いて武力の戦

争なると共に一面には黄金の戦争である、富力戦争の
血戰場である來るべき時運に乘じ黄金舞臺に活躍奮
闘すべき志氣を養ふべきである、一大成功者と謳はれ
成金黨と目さるも皆な時運の潮流に乗じたからで時
運は成功者を産むの諺に外ならない、日露大戦後に於
いて經濟界の變革に乘じ幾多大中小の成金者を出し
商傑を作り成功者を出したるも時運に乘じ得たから
である、是等商戦界に將帥勇士は幾多産み出したるも
此の半面には多くの敗武者も又た尠少でない、勝と云
ひ敗と云ふは機會を捕ふの巧拙に依るのである、唯だ

時運來れば某れも彼れも成功するものではない機會を巧みに操縦するものは勝者となるされば斯の千載一遇の絶好機會に乗じて勝ちを萬人に制せざるべからず、魚を見て釣糸を求め獸を見て鉄鉋を取り寄すが如きは相場界にて成功覺束ない本書説く所に充分着目研究し來るべき機運に乗じ商機の運用を謀り以て進退駈引の一助となし成金の印綬を帶ぶるを得ば著者の光榮是れに過ぎざるなり。

大正六年十月吉辰

著 者 識

株式金泉秘録目次

第一章	緒言	一
第二章	株式相場とは如何なるものか	六
第三章	株式放資の利害	一〇
第四章	取引開始	一三
第五章	株式放資法	一四
第六章	投機的放資法	一六
第七章	日計的投資法	一八
第八章	成功の要訣は機會にあり	二〇
第九章	相場高下の素因	二三
第十章	予が理解せんとする必勝法の原理と特色	二五

目次

一人より
 五八迄
 九五
 一三
 一五
 二五
 三五
 五九
 五二

○ 第十一章 阿部式どんな株でも必ず儲る秘法……………二七

一、法の創定 二、活用法 三、仕掛け利喰法

四、本法による注意 五、實地例

六、東京株式取引所舊株實例 七、鐘紡新株實例

八、大阪商船新株實例 九、日本郵船新株實例

十、南滿鐵道新株實例 十一、本法による大勢 万

第十二章 株式放資に對する注意……………

第十三章 普通株放資の心得……………五九

第十四章 投機的放資者の注意……………六二

第十五章 相場動搖の原因と材料……………七三

一、配當の標準 二、競争による株の影響

三、世の中の好景不景 四、内國商業の盛衰

五、金融市場の状態 六、外國貿易

七、財政と株式 八、政界と株式

九、外交と株式 十、農作の豊凶

十一、天災と事變 十二、賣買仕手關係

第十六章 相場變動特殊の材料……………八〇

第十七章 人為相場……………八二

第十八章 株式賣買の時機……………八七

一、買ふべき時機 二、大機會

三、中機會 四、買ふべからざる條件

五、賣るべきの時機

第十九章 鞘取り賣買……………一〇一

第二十章 熱狂相場に處する法……………一〇七

第二十一章 中相場に處する法……………一〇

○ 第二十二章 天井底直觀察法……………一三

第二十三章 月始めの賣買方針を定むる法……………一三

第二十四章 大勢に従つて賣買を決する法……………一七

第二十五章 持合相場に處する法……………一三

○ 一、天井持合

○ 二、底直持合

三、中途持合

第二十六章 直取引相對賣買……………一七

第二十七章 直取引の計算……………一四〇

第二十八章 直取引賣買注文の仕方……………一四三

△ 第二十九章 直取引翌日の高下を豫知する法……………一四七

○ 第三十章 直取引賣買必勝法……………一四七

第三十一章 阿部式大勢引罫線法……………一五〇

一、引方

二、活用法

○ 第三十二章 陰陽日足引の秘訣……………一五四

一、引方

二、活用法

三、停止暗示

四、天底暗示

○ 第三十三章 阿部式高下直巾測定法……………一六〇

一、昇進相場測定法一例

二、變化定則

第三十四章 高下足取に従ふ必勝法……………一六八

○ 第三十五章 大勢轉換觀破法……………一七三

第三十六章 配當増減と相場の注意……………一七六

第三十七章 株式賣買の商律……………一八〇

第三十八章 端株賣買者の注意……………一八三

第三十九章	材料を利用する法	一八三
第四十章	株式賣買の定法	一八六
✓第四十一章	會社財産簡易調査法	一九九
第四十二章	株式分割放資法	二〇一
第四十三章	會社事業と株の選擇法	二〇四
第四十四章	株式放資初心者の注意要項	二一〇
第四十五章	研究資料株界最近の趨勢	二二三
第四十六章	株式賣買者の修養	二四九
✓一、先づ相場老壯を判すべし		
✓二、其時の相場趨勢にて方針を決せよ		
✓三、利は大にし損は小にすべし		
四、相場は我の爲に造らず		

目次終

目次

五、提灯を點するは大の禁物
六、金好きより相場好き
七、會社の破産豫測法
八、株界金科玉條

株式金泉秘録

阿部 熹 作著

第一章 緒言



古來相場と言へば社會一般忌み嫌つて是の業に従事するものは一種特別の業務とし稍や輕視した者であつたが今や大正の御代となり社會一般の頭腦が發達したのか經濟思想が盛んになつたのか此の業に従事するも左程賤しまない惹いて信用上に惡影響することが尠くなつた是れ甚だ喜ぶべき現象と言はねばならぬ併し翻つて之れ等従事者の多くは世間に内々賣買を試み悪い事でもするやう恥て押隠す

やうに思はれる、決して定期賣買は何等恥づべき事でない正々堂々と賣買を試みればよい、しかし此の業務を嫌忌するの素因は十中の十人が損失のみをなし利益を得るものは或一部分であるため家産を倒し再び立つことの出来なくなるものが多いからである

株式相場は勿論凡そ定期と名の付く相場程意味深遠なる動搖をなすものはあるまい、唯だ上がるか下るかの二道ではあるが世にも難事の中の難事として居る、斯くの如く難事なるが故に此の業に従事する十中の十人が失敗をなすのである、尤も定期は難事業に相違なきも此の半面には一攫萬金の報酬に接することが出来る、何人も儲けたい一大成金者と謳はれたいと必死を盡して賣買を試むのであつて始めより損をしたい乃至は面白いから賣買をなすなど、手出しする者は恐らくない、然らば十人が十人ながら儲けたい慾念一方である、大正四年以來

大相場に出逢つて大小成金者は續出したが果して従業者中の何割に當つて居るか、前にも言つた如く此の業に手を染めんとする初めは極めて秘密埋中に敢行するも少しく利益を得る時は最初の目的を忘れ堂々として社會に自ら吹張るのである、之れに反し失敗損失者は自己に瀬縫の出来得る限り手段を循して他言しない、茲に於いてか成金者は輪に輪が掛けられて社會一般株式相場は容易なのである、男子成功せんとするには相場に限ると思惟し相場上の理義及び賣買上の智識を素養しないで輕卒に手を染むるを常とするのである、若し相場がかくの如く易々たる者であつたら世間に貧乏するものはあるまい、是れ等の輕薄者流が賣買を試み一時僥倖によつて大金を得る事あるも、開は相場の汐先に乗じ得られたに外ならない一朝逆潮に出逢つたれば今迄の利益は勿論多くの資本をも損失するは明らかなのである。

すべて従来株式相場によつて失敗者となつたる多くの人士は此の徑路を脱して居ない、失敗を重ねたる後ちに於いて始めて我の愚なるを悟り輕卒であつた事を省みられるのであるが斯く氣の付たる頃はすでに後の祭で再び従事できないものは數限りもあるまい。前車の覆るゝは後車の戒めである、相場はかくの如く至難の業であつて決して容易く従事すべき業務でない、あらん限りの研究を積み相應の資金を下して賣買を試むるときは誤りは尠ないのである、若し株式相場上の理義に暗きものが易々たるうちに成金者となり得る者であつたならば、此の業に多年従事したる玄人筋は世界の黄金王となるものが幾人も出来るのであるが決して容易く巨萬の財貨を撻ち得ないのである、況んや相場道の智識淺きものは尙然りである。凡て玄人筋は一朝にして一大成金者なる人は稀であるが年中を均し

て損失が尠ない一步一步と牛歩的の發達をなし加ふるに機運に乗じて莫大なる利益を撻ち最後の榮冠を擢るものである、彼の素人成金者は前にも述べたる如く一時の汐先きに乗じ僥倖によつて得たる利益なれば久しからずして再び木阿彌となるものが多い、相當の富を造り最早見切り時として相場界を隱退したるものは最後の勝利者と目される事が出来るも、終始此の業に従事し慾に慾が重なつて飽事を知らないものは必ず曩日の成金は一時の夢となつて仕まう事は予が斷言する所である、早く火となるものは早く灰となるの譬への如く此の相場界によつて將來身を立て家を興さんとするものは安全なる方策を考案し加ふるに相場道の智識を擴く牛歩的に致富を測り假染めにも寶の山に入つたる心持ちにて賣買に従事すべからず。

第二章 株式相場とは如何なるもの乎

株式相場の何たる事は今更ら事新らしく説き立つるの必要を認めないが世間多くは株式相場の性質を誤解して居るものが多いのである。

されば是等人士の爲に一言せざるべからず、今日此の業に従事する大半は株式とか米相場を表面體裁のよき賭博類似に心得て居る其深因となす所は相場其者の高下なす素因及び變動すべき理勢材料四圍の事情を精細に究めずして徒らに運を天に任せ利を僥倖に掬はんとする一六勝負的の氣風を以て之を試むる人が多いからである、然らば取引所其者は如何なる性質を具備して居るか、と云ふに社會が進歩するに従つて公平なる物價の標準を缺くるの懼れあれば之が社會全般に

涉り公平なる價格を構成する上に一も缺くべからざる機關にして經濟界は勿論一般金融機關に密接の關係を有するのである從來取引所廢止論もあつたが是れ等は識者の認め得られないのは理の當然である我國にては明治十一年頃より株式取引所の設立に至つたが歐米各國にては既に遠き昔より盛んであつたので社會が進歩すればする程益々必要に迫られる言ひ換へれば社會の進歩が要求する現象である米株の定期取引は國家經濟界の機關たると同時に商戰場裡の一大主目である富力戰爭の活舞臺である。

而して日々何拾何圓何拾錢と相場が附くのは甲の人と乙の人即ち買人と賣人とがあつて初めて相場の直段が構成するのである若し賣人のみありて相手の買人が無いと假定したら相場が立たない新聞の相場欄中に直段の明示なきは出來不申として賣買兩者なき故である彼の

直段は取引所が勝手に直段を構成したのでない甲の客と乙の客が各々取引ある仲買店に賣りなり買なりの注文を發せば仲買店にては店主代理たる場立が取引所にて一定したる時間に初めて賣買の手合が出来るので取引所は是が審判官となりて相互に間違なきやう賣買の臺帳に記入し其他すべての處理をするのである如斯して公平なる直段が天下に發表するのであれば最も進歩したる商業である、洋の東西を問はず株式相場の價格の動搖が甚だしい日露戰役後の狂熱時代たる四十年一月には東京取引所株が七百八十圓と云ふ未曾有の直段を顯はしたる者が一昨年八月には九十圓内外迄の安直を見せた斯くの如く高下動搖が甚だしいために、一面より觀るときは株式相場は確かに危険なものであるが危険なる故に投資に適せずと云ふ理由はない危険の二字を負擔なす故に一攫萬金の報酬を得るので彼の彈藥は

危険物なるも其半面には如何なる大敵も全滅し得るので、すべて物には両面がある一面には危険を説いて一面には利益を語ることを忘れてはならぬ要は危険を避けて利益を得るに勤めればよい危険の二字は善良なる方法と注意によつて脱することが出来るのである、株式相場は金の運用を謀り機の妙用を發揮する最も適良なる場所である即ち致富成功の活舞臺にして金を得る方法としては最良なるものと云はねばならぬ。

株式相場の放資は貨殖法として最も有利なるものであるが是が適確なる方法即ち巧妙なる駆引と善良なる株券の選擇に慎重と注意を要するは論を俟たない以上二者のことは後葉に叙べる事とし次章に株式放資の利益ある所以を述べん

第三章 株式投資の利害

社會が進歩するに従ひ無數の物慾が増加しあらゆる難問題が発生し何れも其難問題の爲に苦しんで居る而かも將來益々多くの苦しみが横はつて居る生活問題を主とし複雑なる難問題は千種萬別殆んど名狀すべからずである、されば此の無數の慾望又は難問題を解決するには勢ひ資財の必要生ずる言ひ換へれば如何にせば金を得るかにあるので古來地獄の沙汰も金次第の諺がある金なくては一身一家は勿論一國の平和をも維持することが不可能である大にしては國際間の紛議隣國支那に於ける革命戰亂の如く小にしては職工等の同盟罷業に至る迄窮極すれば唯だ金問題である洋の東西を問はず現代の國民は金の爲に惡戰苦闘して居るのである嗚呼黄金なる哉と絶叫せざる

を得ない然り今日は黄金萬能の時代である金なくて春の百花を迎ふるも我に何の楽しみもない秋の明月我れに何等の興感も與へない却て無情を語るの種である、されば如何にして此の黄金を積むべきか如何にして富を致すべき乎の問題を痛切に感ずるのである、我々人類が文明國民として高度の生活を營まんとするには金を得る方法即ち金儲けの道を先づ講じなければならぬ、金を得るの方法と手段は幾等もある其人の意志強固加ふるに永く奮闘活動して挫折することなければ如何なる職業に従事なすも必ず富を致すことが出来やうが現今は優勝劣敗にて能く小資本を以て捷徑に富を造る事が出来ない小資本家も大資本家も捷徑に富を作らんとするには株式賣買に従事すべきである株式相場に放資するの有利なることは學者も實務家も一齊に認むる所である今日我れ一代にて巨萬の富を作り上げたる資産家は

多く株式相場により貨殖し得たのである表面何々事業により成功したる如く臆測なすも全たくは株式放資が大半を占て居るのである併しながら前にも述べたる如く株式相場は變化常なく殆んど機會を捕捉するに苦しむので株式賣買により富を致したる多くの資産家は株式相場將來即ち前途の先見が明らかであつたからで言ひ換へれば駆引の巧妙なりしが故である予は株式放資は最も致富最良の方法である事を説くと共に又た之が半面には駆引の巧妙を要する事を説くのである

一般に思惟する如く株式相場は大なる危険物であつて一六勝負的事業であるかのやうに視るは甚だ偏見であるのみならず舊思想の脱せざる證據である實業必ずしも安全とは言ひ難く多大なる資金を投じ小利益に甘んせざるべからず株式相場は大小の資金に論なく如何程

大なる賣買にても自由にて思惑の立ち次第速に實行し得らるゝのである實業と稱する商品賣買と差の異りはない、實業にても株式相場にても見込違ひの思惑は何れも失敗に終るは言ふ迄もない、高下變動が甚だしいが此の高下動搖中に千載不朽の妙味が伏在して居るのである、以上の如くにして株式相場放資の有利なるを悟ると共に金をして金を生ましむるは金の運用にありと云ふ諺を味ふべきである

第四章 取引開始

前章株式放資の有利なるを知ると共に如何にして賣買を開始するかの方法を説明する必要を感じるのである一度にても指を染めたる人はよく知悉する所なるが初心者爲に一言せんとす、賣買を開始するは極めて簡單にて何等の苦痛も要しない東京には兜町に東東株式

取引所大阪には北濱に大阪株式取引所其他神戸京都何れも株式取引所の近邊には株式取引所仲買人某商店と軒を並べて居る其内の最も確實なる信用ある店に自分の思惑すべき株券を指定して賣買の證據金と共に賣り又は買と好むに隨て注文すれば好いこれにて取引開始の一步である如上の如く極簡單であるが株式放資に三つの區分がある株式の放資法、投機的放資法、日計的投機法である左に項を願ちて述べん

第五章 株式の放資法

此の放資法は株式相場と名稱するより寧ろ會社の株主と稱する方が當を得て居る即ち純粹に有價證券を買入れ之を所持して其會社よりの利益配當したる一定の収入を目的として株券或は債券等を買入る

るのである大なる野心もなく多少とも割の能き有價證券を得んとする資産家又は遺産を有する人若しくは獨立事業を欲せざるもの或は營む事の出來得ざる人により思惑せらるゝのである以上の如く世襲的に放資することは極めて有利であるが是が選擇に最も注意すべき必要がある此の種の放資者は日々の高下波瀾に大なる關係を有しな

いが選擇を誤るときは配當は愚か二足三文の價值をも失ふに至るのである尙ほ此の放資に就き注意すべき事項は是れを買入るべきの時機であるすべて確實なる會社の株券は何時も拂込額面より餘程高く抜いて居る而して高下變動も比較的尠ない併し諸株券の動搖する時は同じく波瀾は免がれない故に勢い前途の大勢を遠觀して思惑するの必要がある茲に革めて言へば

一、思惑する株券の選擇に充分研究すべき事

二、思惑する株券の買入時機に最も注意すべき事

以上の二條件に着眼し是が誤りなかつたなれば株券の放資は金を得る手段方法としての最善の策略である、すべて放資の眼目は元金に疵の付かぬやう一面には収入の大を得る事が主眼である株券の選擇及び買入るべき時機を有せずとも常に株式市場の智識を養成すると同時に内外の形勢に注意を拂はねばならぬ是等選擇方法及び買入時機等は後葉に詳細説示すべし

第六章 投機的放資法

斯の投機的放資法は株式相場の主眼であつて最も多く實行されて居る是れは有價證券を所有して一定の収入を謀るに眼目を置かず一步進んで相場の高下變動の機を見て賣り或は買ひなして直段の差金を

利する投資法であるすべて多くの成金黨を出し又は大失敗を演せしむるは皆此の放資法に外ならぬ株式市場の大勢は勿論日々の趨勢消長の定まるも此種の趨向如何に依るので市場動搖の重要な要素となつて居る即ち長期思惑にて一度機會來れば忽ち賣り又は買ふ前途大勢を觀察して賣買意の如くなすので相當資金を投じ先見の明あれば決して損すべき者でない將來致富を欲し成功を希ふの人はすべからく此の放資法により活動すべきを最も可とす然しながら何れの投資法にても株式市場に接するに巧妙なる駆引及び方針を要する内最も將來の觀察と頭腦を痛切に感ずるは此の放資法である故に斯界の新智識を素養し機を視ること神の如くなれば成功は思ふ儘なるべし要するに大勢を達觀する明あれば素人黒人の別はないのである

第七章 日計的投資法

此の法は株券を買ふも所有するを目的とせず賣るも株券を所持せず日々の相場動搖を利用し直段の差金を目的として賣買するものにて日々市場に出入なし株式賣買をなす世人の所謂相場師である第二章に説きたるものと一見區別なきが如くも前者は長期思惑にて我が意見と考により其賣買せし株券を期月終末には現物を受渡しをなす後者の日計的放資に至りては現物の受渡を目的とせず短期間に賣買を結了なすのである。

- 一、前者は數ヶ月乃至數年にて大勢を觀て賣買す
- 一、後者は單に日々の小變動を巧みに利せんとなして賣買す

以上の如き差があるのみである故に事實之が區別するに苦しむので

ある、此の種の賣買に従事する人を目先師とも場面師とも稱し又た仲買人が客の關係によつて市場に賣り買ひなす凡て客筋の多くは斯の方法に依て居る人が頗る多いのである株式相場は勿論如何なる相場にても目先の賣買ほど六ヶ敷者はない機敏なる行動の下に賣買せねばならぬ小資金を以て縦横に賣買し得る代り成否が最も早いのである。

如上説きたる三つの放資法は身分に應じ又た意志に適合したるものは何れに放資なすも可なれど要はただ機會の二字である他人の知り得ざる中に機會を捕へ賣買其當に處せば必ず致富成功は欲する儘である。

相場道成功の要訣は機會の二字なれど斯の機會なるものは逸し易く早く來るとも又た遅く來るとも不明である要は常に相場が教へ呉れるが故に油斷なく相場に聞け

熹
作

第八章 成功の要訣は機會にあり

前章によつて株式相場の放資に區別あることを論じたが何れの放資に論なく、又た相場に限らず事物何事にて斯の機會の二字を除いては成功し得るものでない機會を巧みに捕捉すると否とに依て成功と失敗の岐るゝ所である、機會の大切にして重んずべきは他にあるまい相場の如く變化百出殆んど變幻極なきものには層一層機會を捕へねばならぬ

即ち賣るべきの機會又た買ふべきの機會此の二者を巧みに捕へる事を得たならば成功も易々たるのである、併し相場道の機會なるものは常に眼前にあるやうでなく、やうである瞬間に來つて寸陰の間に逸し去るのであつて其早やさ加減は電光石火の如きものである、而して此の機會の重んずべきを知るも果して何れを以て機會となすか何を以て捕へるか甚だ苦しむ所である、何人も絶好機會と視て買ひ或は賣るのであるが眞の機會にあらずして萬人が失敗の素因を造るのである損をせんが爲に株に手を出すのでない皆目的は利益の二字たる事は論を俟たない機會と見て買ひ賣つたが眞の機會に非ずして未だ機のをせざるにあつたのである、されば如何にして此の機會を捕へ之れに乗すべきかの問題を研究せねばならぬ。

此の意味に於いて予は本書を公刊し以て諸君が一様の目的たる、成功致富成金を達せしむるの道を講せんとするのである。前にも述べたる如く機會は果して何れを以て眞の機會であるか、常に衆人が等しく頭腦を痛めつゝあるのである。要するに相場道の機會は買つては利し、賣つては利するの目的に外ならぬのであるから、巧みに賣買すべき手段方法を講ずればよい。されば予が多年研究蘊蓄したる阿部式必勝法を講述し以て熱心なる讀者に提供せんとするのである予が叙べんとする方法は他人の賣り得ざる所賣り或は買得ざる所を買ひ巧みに機會を捕捉し最終に至るまで利益を全ふするのである。

第九章 相場高下の素因

相場高下の素因など、今更ら改めて叙ぶるまでもない、高かるべき原因即ち材料あつて上り安かるべき原因材料によつて下るのである、併し此の原因材料が何人も同一に感じ同一に賣買なすものであつたなら相場は常に一方に偏して何等の趣味もないのみか損失する人がないのであるが高下の材料は一にして相場の辿るべき道は唯だ一つよりないのであるが一様の材料を甲と乙の二様に觀察を下し或は買人あり賣人あつて始めて上に下にと高下循環を繰返されつゝあるのである。

相場高下の素因たる材料の觀察を下すことは容易でないのみならず或る特殊株に必ず下落すべき悲觀材料がありながら實地相場には何等の影響をしない却て健實なる歩調を辿ることがある、彼の早耳筋とて高下すべき材料の素因を他人の知り得ざる中に知つて賣買なすも

早耳は早倒れとなつて相場に損失を來すのである然らば材料も何等的にならない事となる或る場合には適切に影響し或る場合には相場に何等の受け答もない、されば如何にして相場を安心して賣買なすか是れ最も痛切に研究を要する問題である、唯だ相場は相場に聞くより他にない、株ではないが米相場の金言に相場は理外の理で動く結論して居る、つまり相場の高下は不可解であると言つて居るに外ならぬ。

すべて相場の一高一低する原因は材料の好悪によつて上下するのであるが材料は前にも言つた如く相場に影響するときと仕ない場合があるそこで相場の高低素因の一大主目は賣人と買人の勢力に歸着する賣人の多い場合は相場が下り買人の勢力の強い時は即ち昇騰を視るのである斯くの如き事は一見何人も平凡に考へて居るが此の平々

凡々たる中に千載不朽の妙味が存在して居るのである。

茲に於いて相場高下の素因を究極して見ると材料によるは勿論なれ

ど最大主目は賣人買人の勢力の強弱如何によるのである。

そこで予が今茲に述べんとするは此の高低の最大主要點たる賣買勢力を巧みに知つて巧みに仕掛け相場の目的たるも小資本を以て大利益を得るにあるのである。

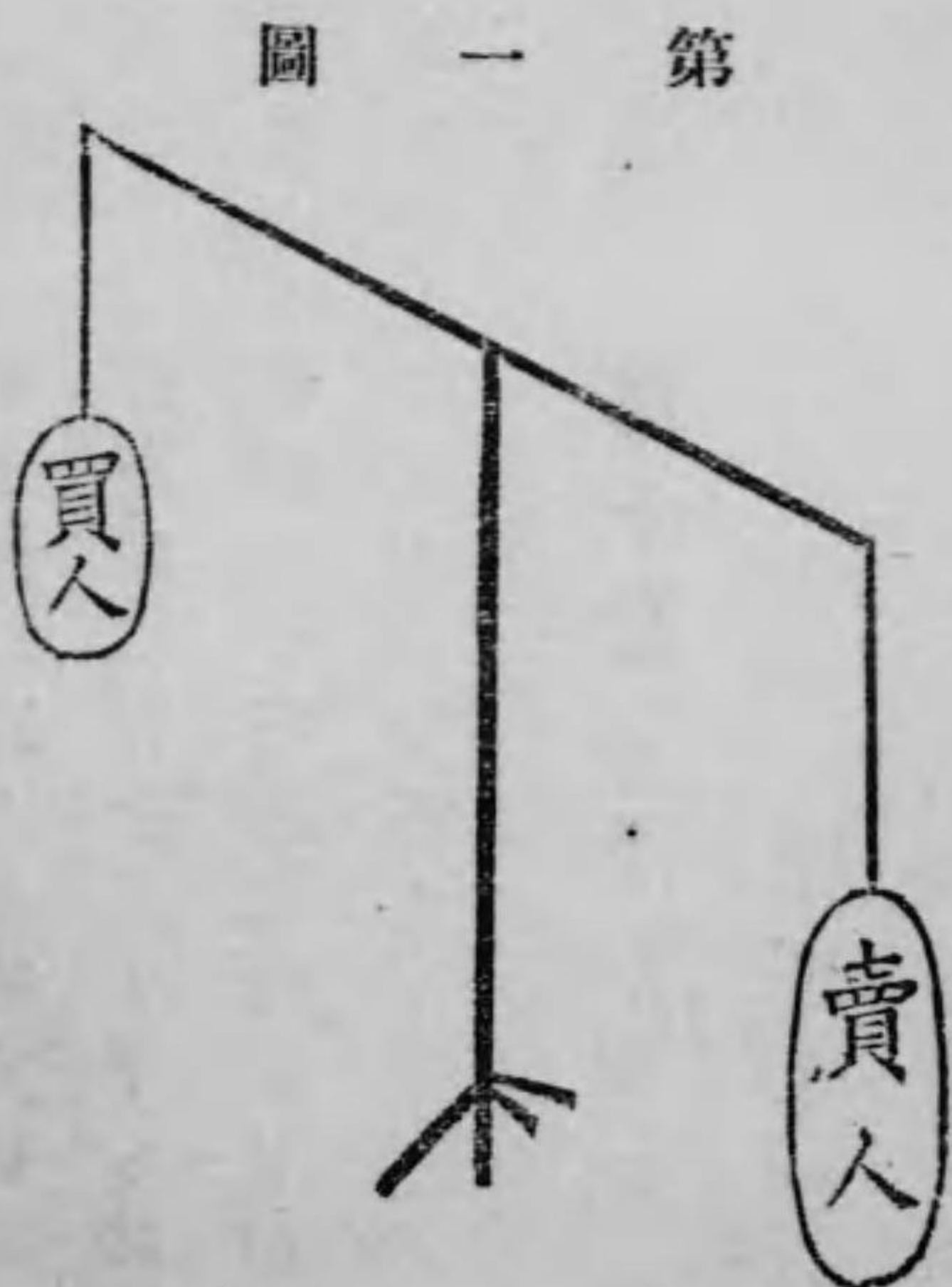
第十章 予が理解せんとする必勝法の

原理と特色

如上に於いて述べたる如く相場高下の最大主要點は賣人買人の勢力の旺衰によつて高下發動の素因を叙べた今茲に理解講述せんと欲するは斯の賣人と買人の勢力を觀破して巧みに賣買を全ふするのであ

る。

たとへば此の勢力の強弱を圖に示せば。



る、かくの如き見易き點に妙味が伏在して居るのに心付かないのである。本書に講述せんとする方法は此の原理を應用し多年苦心の結果

創定したのである。

故に此の法則に依て賣買するときは如何なる會社の株券にても又た如何なる材料の樂悲に拘らず賣人買人の勢力を觀破し、相場が教へ呉れる方向に附從して賣買するのである。

されば材料其他經濟事情等さらに考慮する事なく又たあらゆる事情を觀察或は調査を要しないのが本法の獨特とする所である。

第十一章 阿部式どんな株でも必ず儲る

秘法

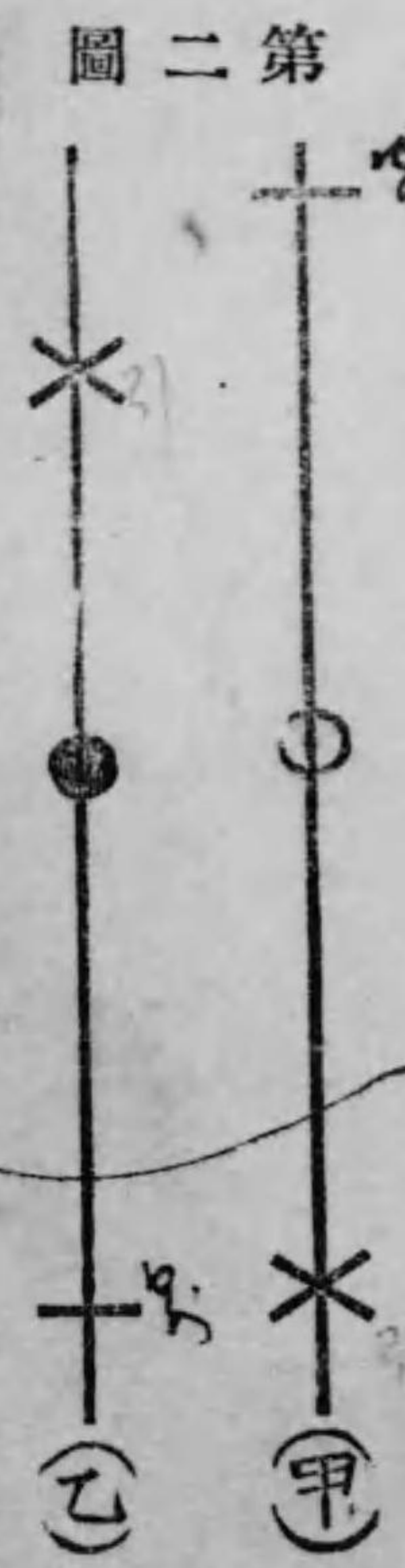
如上に於いて一と通りの事は説明した本書は文を講ずる者にあらずして相場必勝の法則を講述せんとするのである、されば飾言議論を抜とし唯だ實地を旨として理解説明せんとす。

前章に述べたる如く相場高下すべき素因即ち材料其他周囲の事情を調査せず相場賣買の勢力を根本として創定したのであるから先づ第一に相場の勢力を觀破せねばならぬ併し此の勢力は其人の頭に感じやうによつては強くも弱くも聽くことが出来るから一の野線即ち相場が高低する直段を標準とせねばならぬ此の相場高低したる足取りにはすべての材料其他大手の動靜及び一般的高下素因を含んで居るのである。故に高低する直段によつて賣買兩者の勢力強弱を觀破せねばならぬそこで本法は相場高低する所の足取りによつて將來を豫想し賣買を實行するのであるが故に勢ひ高下したる野線を利用せざるべからず。

一 法の創定

右に述べたる如く高下したる高下足取野線によつて一の法則を創定

して賣買を定むるものとす此の方法は前途の相場を豫測判斷するのではなく相場が示す方向に附從して賣買するのであつて即ち相場が賣れ買とへ指示するやう考案したのである。さらば如何なる方法を構成するかを理解せんに本法は日時如何を問はず一日中に前場後場と立會ものを三場間總括して斯の三場間の中心直を標準として三場間の中心直より其時の相場趨勢即ち大相場中小相場何れなるかを見て賣買をなすのであるそこで終始三場間々と相連續して足取りを描き常に此の中心直を



定めて行くのである。前
後場の論なく三場間を
總括したる野線を

第二圖 ばよい、是れが描き方を示せば

第二圖の如く棒状に描き○(一)×印を附して足取りを明瞭にする
ある而して

- 一、|印は三場間に於ける高下直巾
 - 一、二印は三場間に於ける最初の寄付き直段
 - 一、×印は三場間の最終の引直を明示すべし
 - 一、○印は三場間に高下したる中心直段とす
- 先づ以上の如く區別して描けばよいのである是れが實地引方を理解
せんに

日本郵船新株大正五年十月二日ヨリ高下表

十月二日	前場	一五九、〇〇	後場	一五八、四〇
	前場	一五三、九〇	後場	一五二、〇〇
十月三日	前場	一五四、〇〇	後場	一五三、九〇
	前場	一五三、九〇	後場	一五四、〇〇

四日	前場	一五九、〇〇	後場	一五八、四〇
	前場	一五七、九〇	後場	一五七、七〇
五日	前場	一五八、九〇	後場	一五九、九〇
	前場	一六二、四〇	後場	一六二、四〇

以上の如くありとすれば十月二日の前場より三日の大引まで前に記
したる如く描く次は四日前場寄付きより五日前場引まで描くのであ
る斯くの如く三場間づゝを相連続して日時如何を論じないのであ
る、唯だ前の三場間を標準として後ちの三場間の駆引方針の一助とし
て巧みに賣買を敢行するのである、すべて賣買せんと欲する株券の高
低は常に野線に描き油断なく形勢を見る、引方は前圖の如く引けばよ
い寄付より最終場の引直及び中心を明瞭にする即ち第二圖の(甲)は下
落相場の状態(乙)は昇進相場の状態と言ふことが明瞭する而して(○)印

のある中心直段に最も着目すべき主要点である即ち此の中心直によつて示後の方針を確立する最一の方針点である。

二 活用法

如上に叙べたる法の創定は極めて簡易にして何等の技術も要しない平々凡々たるのであつて是れが活用方法も又た極めて容易なものである。

先きに叙べたる如く○印の中心直段を方針点として、此の中心直より相場の趨勢により左の直巾を過ぎて賣買するのである。

- 一、大相場は四圓巾
- 一、中相場は三圓巾
- 一、小相場は二圓巾

以上の直巾を此の中心点たる標準より上に此の直巾をつけば茲より

買建て下に相場があつた時は賣るのである但し右法則の直巾に一二丁不足するも差支なく採用するのであるたとへば規定は大相場は四圓巾即ち四十丁巾であるが若し三十八丁よりなきときは之れを四十丁と見做して賣買するのである凡て商法の律として成可高き所を賣り安き所を買ふのであるが、本法は右所定の直巾を行過ぎて賣買建玉するのである故聊か遅き感が起るかも知れないが相場は危険な者であるから漸々相場は天井濟ました後ち峠を越したる下り坂道より賣り底を入れた上り坂より買初むのである。本法は俗に言ふ石橋を金棒で叩きて渡る賣買法に外ならぬ。

要するに一見遅いようであるが決して遅いのでなく却て早い仕掛けとなる真天井を賣り或は眞の底を買ふと言ふ事は殆んど不可能事に屬するのである

三 仕掛け利喰法

既に如上に於いて法の創定及び活用法を述べたれば之れが仕掛け及び利喰法を理解するを以て順序とす活用編にも叙べたる如く三場間の中心點より相場の大小によつて異なる所定の直巾を過ぎて賣買なすのである。

仕掛け方法としては只だ單に實行すればよいのであるが相場の高下循環する中右法則が第一圖に出現したる際仕掛け後ち反對の法則の出現を待ちて利喰轉賣買をなすのであるたとへば

從來下落して居たものが買法則出現して買建てたと假定せば次ぎに賣り暗示の出るまでは絶對的利喰をしないのみならず中途には一切賣買をしない相場の大小に拘らず賣り法則出現と同時に前の買を利喰し同時に噸轉賣を試むのである兎に角中途には一切手出し仕ない

ので最初の法則に従ふことを忘れてはならぬ。

又た限月の變り或は新甫に活用する方法は前月より引續き相場即ち前月の先物が中限になる故引續き中限に連續して野線足取りを描きて中限にて賣買何れが法則の示すに従つて先物を賣買する併し中限引續應用するのは月初めの三場間即ち一日半丈けで三場間を濟めば先物を以て方針を確立するのである。

而して主力株又は端株の如何を問はず如何なる株にても活用自由自在である

四 本法による注意

前章に講述したる賣買すべきの要所即ち三場間の中心より右述べたる所定の直巾は凡て能く高下をなす主力株を以て標準としたのであるが若し變動少なき端株の如きは中相場小相場の分を適用するやう

にすればよい、期米の如く米のみの相場に非ずして其數實に多いか
盡く是れのみを活用する事は不可能である、唯だ要は相場の高低に
じて適宜に定むべきである、而して本法により賣買するもの、聊か注
意となるべき事を叙べんに

相場は一大活物である、法は死物であるから各自が適良なる法を加へ
以て頭によつて活かして使はねばならぬ併し無暗に取捨を加へる事
は不可能であつて唯だ要は其相場に準じて所定の直巾變更すること
及び大々の突飛なる相場状態にて賣買法則出現のときである、たとへ
ば従來下落相場が或る動機に振れて一氣に大上寄りするときは必ず
買法則とするのであるが、斯くの如く大々の大上寄して買法則の出づ
るときは一時相場の様子を見て仕掛くるやうにするのである、多く人
工を加ふるは何等法則を制定するの必要は入らないのである故に此

の意を了解して賣買すべきである。

又た外觀の事情を見聞きして節角の機會を免すことがある、是等は平
生の修養によつて定まるのであるが成可法は實行すべき事に修養を
積まねばならぬ

本法と雖も百的百中、十が十ながら全勝を得る法でなく、相場道には決
して百的百中はあるべきものでない、只だ要とする所は損失ある場合
は成可軽く、利は必ず大に測るのである、然る時は能く最後の榮冠を攫
るは論を俟たない、本法によるときは此の目的を完徹して餘蘊なしで
ある故に時には損失することもあるが決して其損失に匹儔して機會
を失してはならぬ。

注意とするの點は即ち茲に存するのである、されば二三の株式相場の
實例を擧げ本法の如何に妙法たるかを證明せん、且つ又た實地例證に

よつて尙精密に理解講述して見やう。

五、實地例證東京株式取引所舊株實例

東京株式取引所株は親株及び子株を有し何れを實例するも法に於いては何等替りはない先づ大正五年九月中の親株より一例を示さん

- (1) 一日前後場ト二日前場 高直 三百二十二圓 安直 三百十九圓二十錢 中心直 三百二十圓六十錢
- (2) 二日後場ト前後場 高直 三百四十二圓 安直 三百二十二圓六十錢 中心直 三百三十二圓三十錢
- (3) 五日前後場ト六日前場 高直 三百四十一圓 安直 三百三十一圓 中心直 三百三十五圓五十錢
- (4) 六日後場ト七日前後場 高直 三百四十圓 安直 三百三十圓七十錢 中心直 三百三十五圓卅五錢
- (5) 八日前後場ト九日前場 高直 三百三十四圓二十錢 安直 三百二十四圓 中心直 三百三十五圓十錢
- (6) 九日後場ト十一日前後場 高直 三百三十八圓五十錢 安直 三百二十九圓 中心直 三百三十三圓七十五錢
- (7) 十二日前後場ト十三日前場 高直 三百二十九圓五十錢 安直 三百二十一圓九十錢 中心直 三百二十六圓二十錢
- (8) 十三日後場ト十四日前後場 高直 三百二十九圓九十錢 安直 三百二十九圓九十錢 中心直 三百三十四圓六十錢
- (9) 十五日前後場ト十六日前場 高直 三百四十七圓八十錢 安直 三百三十六圓九十錢 中心直 三百四十二圓卅五錢
- (10) 十八日十九日二十日前場ノミ 高直 三百五十二圓四十錢 安直 三百三十五圓 中心直 三百四十三圓七十錢
- (11) 三十一日前後場ト三十二日前場 高直 三百三十七圓五十錢 安直 三百二十三圓三十錢 中心直 三百三十圓四十錢
- (12) 三十二日後場ト二十五日前後場 高直 三百三十四圓八十錢 安直 三百二十七圓 中心直 三百三十圓九十錢
- (13) 三十六日前後場ト二十七日前場 高直 三百四十四圓 安直 三百二十九圓三十錢 中心直 三百三十四圓六十五錢
- (14) 三十七日後場ト三十日前後場 高直 三百三十七圓八十錢 安直 三百三十三圓十錢 中心直 三百三十三圓九十錢

322
3206
342
3226
2766
33780
330
160780
322
14

322
3192
1641
213246

下の例は
特別例
有り
損失
に成る
場合
の例も
上げぬば
不公平
有り

- (9) 十五日前後場ト十六日前場 高直 三百四十七圓八十錢 安直 三百三十六圓九十錢 中心直 三百四十二圓卅五錢
- (10) 十八日十九日二十日前場ノミ 高直 三百五十二圓四十錢 安直 三百三十五圓 中心直 三百四十三圓七十錢
- (11) 三十一日前後場ト三十二日前場 高直 三百三十七圓五十錢 安直 三百二十三圓三十錢 中心直 三百三十圓四十錢
- (12) 三十二日後場ト二十五日前後場 高直 三百三十四圓八十錢 安直 三百二十七圓 中心直 三百三十圓九十錢
- (13) 三十六日前後場ト二十七日前場 高直 三百四十四圓 安直 三百二十九圓三十錢 中心直 三百三十四圓六十五錢
- (14) 三十七日後場ト三十日前後場 高直 三百三十七圓八十錢 安直 三百三十三圓十錢 中心直 三百三十三圓九十錢

如上の如く三場間の高直安直及び標準とすべき中心直を示した相場は發會より健實なる歩調を辿り第一に三場間にて(1)の中心直を造つた相場が大相場であるから此の中心直より四圓高下に附従するのであるから後場第一立會引直三百二十四圓十錢にて買法則を示して假りに買ったものとする相場は大昇騰を見せて(2)(3)線とも其儘となす(4)線の九日前場にて入れドレン賣越す九日前場に至つて俄然昇騰した

るも(5)の中心直より四圓方上に抜き得ず故に賣建の分は其儘となす
 然る所十二日の前場迄安く十三日後場に至つて三百四十圓にて買法
 則を示したから以前の賣りをドテン買越しとなす其後相場は破竹の
 勢を示して昇進を見せた所が二十日に至り俄然大暴落を示し引直の
 三百三十五圓にて以前の買を利入れドデン賣越す其後二十五日大引
 三百三十四圓六十錢に再び買暗示出現し之れにて買建の儘來月戦に
 移る如上の成績を見るに本月は比較的大高下なしたるも其割方利益
 尠なく差引やうやく百丁内外よりなき勘定となる併しながら如何な
 る月に遭遇するも損失の憂なきは本法の特色とする所である。

35
25
00

四〇

六、鐘紡新株實例

前章には東株の實例を示した而して三場間の日時及直段を精細に示
 したが今茲には只だ三場間の中心直のみを顯はし説明を加へん

- | | |
|--------------|--------------|
| (1)百七十五圓三十錢 | (2)百八十一圓八十錢 |
| (3)百七十九圓九十錢 | (4)百八十圓八十錢 |
| (5)百八十圓九十錢 | (6)百八十圓四十錢 |
| (7)百七十九圓六十錢 | (8)百八十四圓八十錢 |
| (9)百九十一圓五十錢 | (10)百九十九圓八十錢 |
| (11)百九十二圓三十錢 | (12)百九十三圓三十錢 |
| (13)百九十九圓四十錢 | (14)二百六圓五十錢 |

三場間の中心直は右の如くにして(1)の中心直を二日後場に至つて突
 破し百八十圓五十錢にて買建つ其後十三日頃までは持合にて一高一
 低したが賣暗示を出現しないから其儘とす十四日より大昇騰を呈し
 二十一日後寄百八十九圓五十錢にて以前の買を利入れドデン賣越す
 所が二十二日前場に底を突き押目を造つて再び昇進の歩調に入つた

百九十六圓九十錢にて買暗示を示したから賣りを損切りしてドデン買越し其儘翌月戦に移る、買建て後百二三十丁の大昇騰を見せた要するに本月は第三回の賣買し第二回には七十丁餘の損失を來たして居るから差引損益動定するときは百四十丁内外の利益となる。

如上例證を挙げたるが其他如何なる株式にても此の原理を應用して賣買するときは決して損失を來すことがない、縦し少額の損失なす月あるとも一年を通じては莫大なる好利益を得る即ち投機の目的たる元本に疵を付けず漸時に大資を獲得し得らるゝのである。

七、大阪商船新株實例

次ぎは大阪商船新株の實地例を示さんとす凡て前各項に實例を挙げたるは大正五年九月中の高低にて本年中に於ける本法の最も利益の尠なく且つ誤り多き月を選びて舉示したのである何となれば利益多

く本法の發應確實なる月は諸彦に於いても何等疑問を起らざればなり、されば左に商船新株の實地例を舉げて前項と同じく寄引及び高安直市を除き中心直段のみを掲げて説示す

- | | |
|--------------|--------------|
| (1)百一十一圓九十錢 | (2)百二十二圓五十錢 |
| (3)百二十五圓八十錢 | (4)百二十七圓 |
| (5)百三十二圓九十錢 | (6)百三十圓五十錢 |
| (7)百三十二圓二十錢 | (8)百四十三圓五十錢 |
| (9)百四十六圓八十錢 | (10)百五十三圓 |
| (11)百四十圓十錢 | (12)百四十四圓五十錢 |
| (13)百四十七圓六十錢 | (14)百五十圓 |

本月中の三場間の中心直を示した者にて之が賣買の要所を説明せんに、先づ第一の中心直百一十一圓九十錢より四十丁以上の直段は二日大

引百二十一圓五十錢にて示したから茲にて初めて買建つのである其後相場は昇騰又は昇騰と連日に涉りて上進みのみを繼續した(10)の中心直百五十圓を附けて暴騰の半面押目の反動安を示し二十一日前場にて賣りを示したから以前の買建を利抜くと同時にドレン賣越すの止むなきに至つた其後二十二日まで相當の下落あつたが好押目を造くつて再び昂進機に入つた而して(11)の中心直たる百四十圓十錢より丁以上昇進した二十六日の百四十六圓五十錢にてドレン買越すと茲に此の二十丁の損失を來たした譯である其後稍強調を辿つたから買建は其儘となして翌月戦に移つた事となる而して相場は稍や強硬なる中に納會を告げた。

八、日本郵船新株實例

前項と同じく三場間のみの中心直を指示し以て説明せんとす實地直

段は凡て大正五年九月中とす。

- | | |
|-------------|--------------|
| (1)百十八圓五錢 | (2)百二十圓 |
| (3)百二十五圓五十錢 | (4)百三十八圓八十錢 |
| (5)百三十五圓七十錢 | (6)百三十三圓七十錢 |
| (7)百三十二圓八十錢 | (8)百三十八圓七十錢 |
| (9)百四十二圓八十錢 | (10)百四十七圓 |
| (11)百四十圓 | (12)百四十一圓四十錢 |
| (13)百五十圓 | (14)百五十一圓七十錢 |

以上の如く中心直段を得たされば實地につき説明せんに、先づ第一の中心直は(1)の百十八圓五錢なり此の中心直を標準として實地の相場が何れに高下するかを、着目するに其後漸次昇進歩調を辿り四日大引には四十丁上の百二十二圓に引けた是れ即ち買法則であるから之れ

にて買建つのである其後八日まで奔騰を示し小天井を造りて十三日迄で押目下落を見せた(5)の百三十五圓七十錢の中心直を示して、下押した法則の四十丁を下落せず三十丁餘より見せず再び昇進の機運に立至つた故に以前の買建ては其儘となつて居る、相場は倍々暴騰して十九日にも小天井を構成して(10)の百四十七圓の中心を造つた而してそれより、下押の趨勢強くして二十二日寄付き百四十一圓十錢にて賣法則を示したから四日大引に買建てたものを利喰すると同時にドデシ賣越した事となる然る所、二十二日後場寄付を押目底として再び昇進を示し(11)の百四十圓を抜く事三十八丁も上に二十五日の大引にて顯したから是にて再び以前の賣りを損切りすると同時に買建てた所が相場は倍々寸退尺進の歩調を表はして百五十三圓四十錢の高直に納會を告げたのであつた故に買は其儘となつて翌月戦に持ち越すのである。

斯の郵船株の實地は最も有望な月であつた損失は僅々三十丁にて手數を加算するも約四十丁程にて其他は殆んど全勝を得て居る。

九、南滿鐵道新株實例

前各項に涉りて高下波亂の度合多きもの、實例を擧げたが今茲には變動尠なき南滿新株の實例を示さんとす而して變動尠なきものは中心直たる標準より二圓高下に附従するを適當とするのである偕て例により中心直も日時を記さず直段のみを列擧すべし。

- | | |
|-------------|-------------|
| (1)六十六圓七十錢 | (2)六十六圓七十五錢 |
| (3)六十九圓五十錢 | (4)六十五圓七十五錢 |
| (5)六十五圓 | (6)六十四圓六十錢 |
| (7)六十四圓七十五錢 | (8)六十五圓十錢 |

(9)六十四圓九十錢

(10)六十五圓三十錢

(11)六十四圓五十錢

(12)六十三圓五十錢

(13)六十三圓七十錢

(14)六十二圓五十五錢

右の如く高下波瀾が遅々たる歩調にて先第一に(1)の中心直六十六圓七十錢より次ぎの中心直までに二十丁の高下なく月末に至るまで中心直を造つて二十丁の直巾を高下したるものなし故に最初の中心直たる(1)より二十丁高下に附従するを可とす。故に九日の寄付六十四圓七十錢にて初めて賣法則として賣る。其後、月末に至るも買法則出現せず六十二圓九十錢にて納會を告げたのであつた。

如上の如く極めて高下波瀾少なきものは附従すべき規定の直巾は十二三丁位ひに定むるを可とす。すべて其株式によつて此の直巾を規定する事とせば甚だ妙である。何分法は死物であつて活物たる相場には

唯だ活用に待たねばならぬ。活用する人の頭によつて法其物の妙を發揮し得らるゝのであるから右に叙べたる法則を根本として凡ゆる方面に實驗應用し以て相場必勝の實を擧ぐべきなり。さて前各項實例中日本郵船新株が一番好成績を示して居るが何れの株券を例證するも大同小異にして本法によるときは全然失敗に終る如き月は斷じてない相場の波亂に應じて、必ず大小の利益は得らるゝのである。されば熱心なる諸君が既往の相場足取を對照して本法を基礎とし他に是れ以上の良法を考案なして相場策戦上の好資料となされん事を希望するのである。

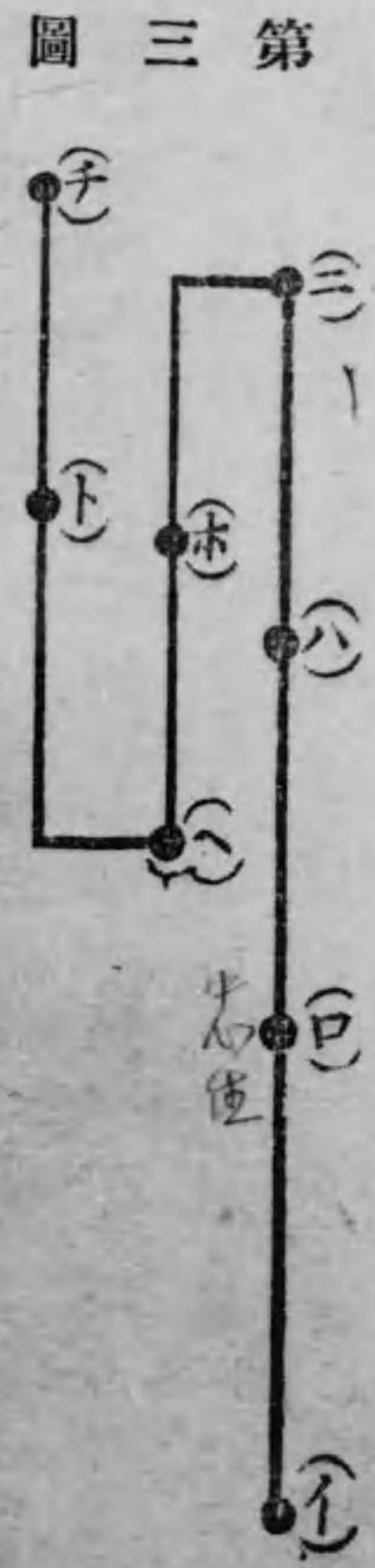
又た取引所にて建株全部又は大半の實例を擧ぐべきなれど原理原則には聊かも異なることはない。唯だ變動する高下の度合によす附従すべき一定の直巾を多くし或は尠なくすれば可なるのである。多くの實例

を示すも徒らに貴重紙面を費すのみなれば略することになし本法による大勢の見方を理解せん。

十、本法による大勢の見方

予が考案創定したる前述の方法を利用して能く前途の相場を観察し得らるゝのである。而して方法としては極めて簡易にして唯だ三場間の中心直を高下に從ひ相連続して足取野線に描くのである。

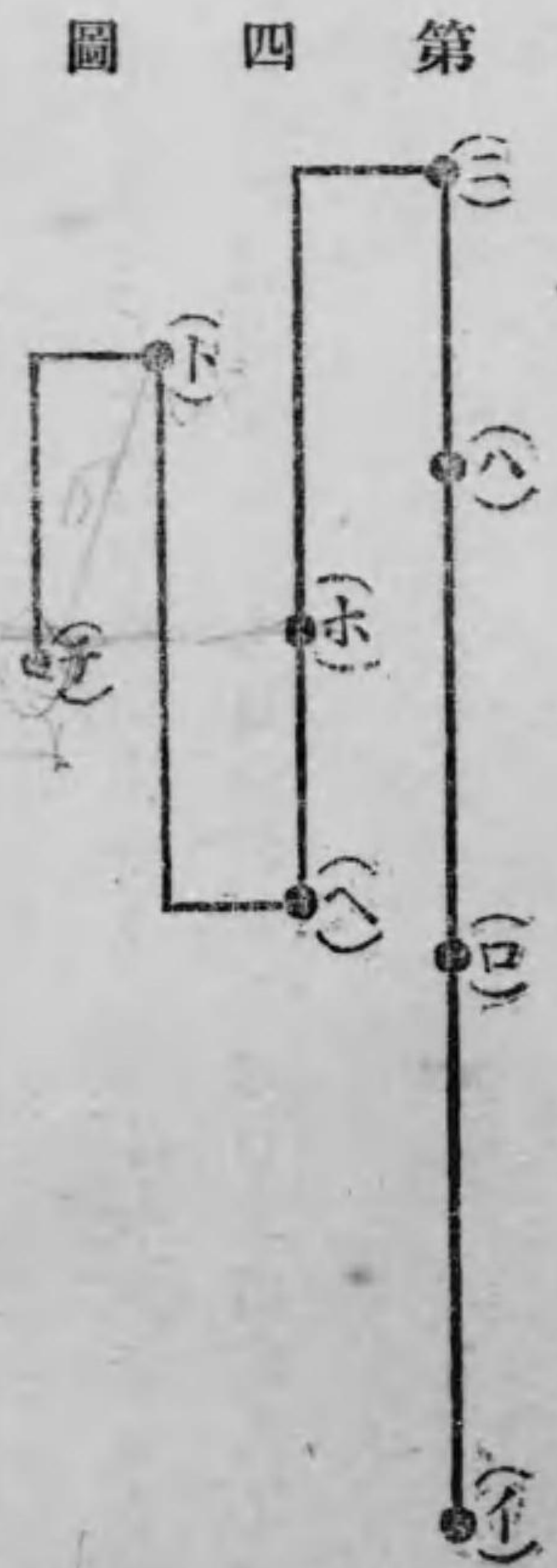
此の中心直を明瞭に星を附けて引く即ち第三圖の如く描けばよい。



第三圖の(イ)(ロ)(ハ)等の星點は三場の中心直段である而して之れが

活用法たる見方は上圖の如く(イ)より(三)まで昇進して(ハ)まで下落した

が上げ相場中の下げ即ち押目と見るのである是れが理解は左に圖を以て指示せん。

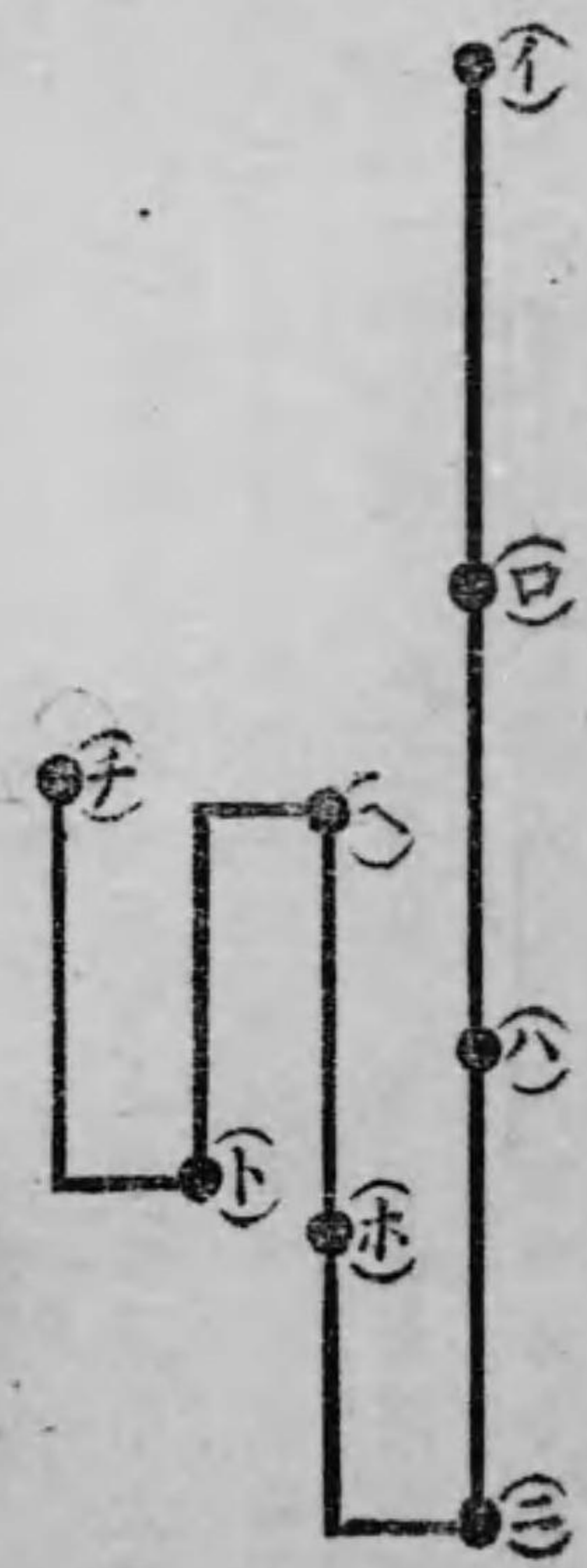


第四圖の如く(ハ)より(三)まで昇進して(ハ)と軟弱を顯はすも賣らず(ト)と昇進したが(三)の高直に

達せずして(チ)と再び軟弱を示すときは最早大勢は下落せんとする前提と見て是れより賣方針を採るのである尤も(ト)と(チ)との直巾は尠なくも十五丁巾以上でなくば採らない。若し萬が一(チ)と軟弱になつたが又々硬調を演じて(ト)の高直を上回りするときは以前の賣りを損切りすとの同時に買越すのである。下落相場は之れを反對に活用すればよ

い、即ち第五圖の(チ)にて買暗示と見るのである。

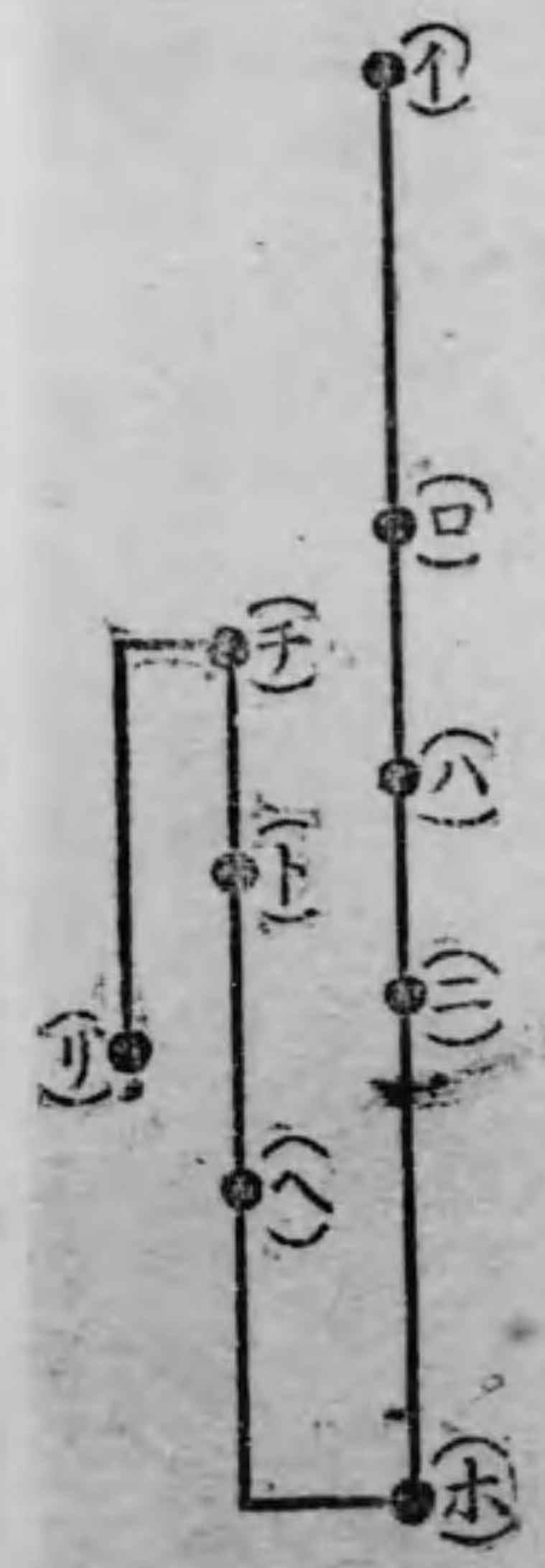
第五圖



又た第三圖の如く相場が昇進して(ハ)まで押目下落を演じた後(ト)と再び上に星點を附すときは是れを

追撃節として再び買乗すやう心掛くべきである併しながら底直より數回押目を造た後ちは深追ひしない三回若しくは四回位いまでは追

第六圖



撃するも可とす而して下落相場は第六圖の(リ)を追撃賣場と記憶すべし。

若し(リ)にて賣込んだが其の後ちの星點にて(ホ)の安直底に達せずして強調を辿り上に屈曲を附けたるときは第五圖の法則となるが故に此の間は臨機應變の活用に待たねばならぬ。

如上の如く大勢の見方としては至極容易であつて而も能く前途の相場を指示し確たる斷定を下すことが出来るのであるから前項に述べたる三場必勝法に之れを取捨活用するときは十中九迄では常勝を得るのである、たとへば三場標準法により買つて昇進した相場が中途にて賣りを示すも本法により大勢上げの中の下げと観破するや唯だ利入れのみに止めその後ちの形勢によつて進退を測ればよい。

すでに本書の目的たる、どんな株でも必ず儲る法は盡く説明し盡したのである、併しながら株界によつて將來富を造らんとするの諸君は是非株式相場全般の智識即ち賣買の理義を明らかにせざるべからず、故

に以下是れより株式相場賣買上必須重要な事のみを理解講述せんとす冀ば兩々相待ちて方針の一助とすべきなり此のすべての理義を明らかにすに於いては決して相場は危険とか不可解の文字を冠するに至らぬのである。

さて株式放資には三種の放資法に區別してある一は投機的一は配當を目的とする株式放資である、一は投機の中の投機的即ち直段の差を收利するものゝ具體的手段方法を叙べたのであつて單に株式の放資には餘り必要でない様であるが此の方法を利用して放資すべき時機を確定すればよいのである。

凡そ株式相場によつて致富成功を希望するものは斯界の理義を明らかにすの必要があるは論ずる迄もないされば以下各章に區分してあらゆる方面に涉り有益なる事項を擧げ參考に資せんとす。

さて株式放資に對する注意としては後章に於て述べたる如く純粹に株式に放資するは多く獨立的事業を欲しない人々或は世襲財産を所有し毎年一定の收入を謀るの方針より出でたるものにして、元金を失はず確實安全に利殖せんとするのが主眼目である、されば如何にして安全と云ひ不安安全と云ふ事を判断を下すべきか甚だ容易の業でない、直段の高安についても甚だ茫漠たる感がある、會社の報告及び決算表を見ると何れも基礎確實のやうに視ゆるが果して確實なるものか種々考慮したれば疑問は滾々として湧き出づるのである、又た割高とか割安と云ふも其市價は周圍の事情に依つて一高一低は免がれない彼の市債とか公債は最も確實なるに相違なきも時には額面百圓のものが八十圓内外にも下落する事がある茲に於てか株式放資者も幾分投機的性質を具備して居る是れによりて一定の收入を豫期し得るとも

論じられない又た全然安全であるとも言へない、然し疑つては思案に及ばずと言ふ俗諺もある、考へれば限りがない、考慮しないは甚だ愚であるが餘り考へ過ぎるも亦た愚者の中である、要は常に株式相場の景況に應じて元金の維持を圖ると同時に一方には成る可く所得を得るやう自ら保護する方策を講ずればよい。

又た普通の株券としては如何なるものも配當の一定を期し得るといふ事は出来ない性質のものである、左れば收入確實なる放資物は如何なる者であるかと云ふ事を擧げて見れば先づ左のものであらう。

一、債券

一、優先株

債券は其條件如何によりて利息の指定したる期日に至り支拂れぬ時は會社の財産を差押へ得るの権利があるのみならず會社の財産に對

し権利者である故に其會社の收入資産に對し先取權を持つて居る又た積立金法により償還方法の立つて居るものなれば放資者として最善のものである、債券の中には永遠不償還の者もあるが是等は極めて稀にて問題にはならぬ、斯の債券の償還方法は左の法に依る。

- 一、時々抽籤法によつて一定の代價を以て拂戻す者
- 一、市場から債券を買入入れる方法もある
- 一、他の會社の株券を買入れ債券の期限満期に是れを賣拂つて償還することもある

先づ以上の如き方法に依るもので斯の債券につき注意す可き事項を一言せんに、會社の收入及び財産を抵當とし其收入財産等にて十分債務を履行して尙ほ十分餘剰所得を有する者でなければならぬ、又た一般財産を抵當とし或は抵當を指定せざるや否を顧慮する必要がある

抵當ありとせば一番順位か二番以上の順位かを考察せねばならぬ二番以下の抵當債権者は一番抵當の債券が如何に多きかをも検べなければならぬ。

次に優先株である優先株の確實な事は殆んど債券と同じやうである此の株の所有者は會社に對し特別の優先權を有して居る若し會社の清算を行ふ場合には普通株主より株券面の金額丈けは先き取る所の權利がある併し債券よりは劣るものである故優先株所有者は常に會社の財産状態は勿論収益の割合に注意せねばならぬ。

亦た危険なる會社の優先株は額面以上には買つてはならぬ何となれば不幸にして精算する場合額面丈けより支拂を受くることが出来ない例令ば五十圓券を六十圓に買へば十圓の損となる四十圓にて買へば十圓の利益となる兎に角相當収益ある會社は財政状態も良好であるから容易には解散を行ふ事がない尤も不時の不幸失敗は別問題である。

第十三章 普通株放資の心得

債券或は優先株放資と異なり普通株其物を純粹の放資物としては眞に適當であると認められない引いて配當も一定確實とも期し難く會社の盛衰即ち事業の興敗によつて配當は勿論市價にも影響を受くる事が甚しく、こゝに於てか幾分投機的分子を含みで居る放資者其人も亦た投機的考察の下に進退を決する方が得策である。

要するに何れの株券を問はず放資の目的たる利益を擧ぐる事にある以上放資するに先立ち利益の動搖如何即ち其株券が果して利益を生ずるや又た利益が減少する事なきやを吟味する必要がある、會社の營

業報告又た貸借對照表等により營業當局者の性質及び營業振り其他一般經濟界にて其營業が有利に推移しつゝありや否や過去の好況年及び不況年について其動搖の程度乃至抵抗力の如何を調査する必要は勿論である茲に純粹放資者の必要條件を示せば

一、一朝同業者に競争を受くるも是に抵抗し戦ふ餘力ある會社を選び若くは之れに反し競争に接して忽ち困難に陥るが如き會社には放資しては不可能である

一、株式の市價を引去るも尙多分の資産を有する所の會社に放資することが最も當を得て居る

一、二年内或は數年間の好景不景にも堪へ得て其株式の市價に更に何等の影響を受けないものを選択するがよい

一、會社事業の廣狹性質、又は政治上若しくは其他の動搖により影響

し易きや否や、時の流行により生産物の需要に影響を受け易きや否やである

先づ以上の如きで是れを總括して言へば配當が一定して相場に變動少なきものを選択すべきである、此の種の投資者は極めて少部分である以上説示した所に充分着目研究し自ら冷靜なる判斷の下に株式放資なさば蓋し誤り少なかかるべし。

第十四章 投機的放資者の注意

此の放資者は最も範圍が廣く且つ前章の純粹株式放資と異り甚だ妙味が多い株式放資者より稍や進退駈引に就いては頭腦を要するも從つて利益が多いのである、要するに株式前途の先見の明があれば斷じて損失の憂がない縱ひ一時見込が違ふも其株券を引取り再び機會の

來るを徐ろに待ちて相當直段の出づる際賣り離せばよい、日計的投機者の如く些々たる小掬ひの目的でなく深く精神を勞力するの要はない不幸にして會社が不時の失敗に罹らぬ以上何等の苦痛も心配もいらず、只だ相場が豫想外安くなつた時は實價ある有望なる株を覘つては買と云ふ方針さへ持續して行けば利益あるに極つて居る。

株式相場の變動は循環的のものである世の中の景氣不景氣に依りて興衰はある、何日も衰禿時期計りでない又た一陽來復の春も來り早晚大相場に出逢ふ機會は度々ある其時初めて以前安く買つたる者を見込を付けて賣り第二の方針を徐ろに再び活動せばよい。

株式市場が如何に振はなくとも實價ある會社の株なれば年いくらかの利益配當を得る此れ程一舉兩得の思惑物は他にあるまい、此の種の放資者の注得すべき點は證券の實價と相場變動の理勢を知るとの二

條件である其他は前章に理解したるものと何等異なることはない。

第十五章 相場動搖の原因と材料

如上に於いて株式に放資するに三途あることを論じ尙之れ等につき、それ〴〵注意事項を述べたのである、何れの放資に限らず相場の高低する理勢を明らかにする必要がある、第九章に説示したるものと重複の如きも今茲には材料觀による變動の素因を講述せんとすするのである。

凡そ相場道にて成功を欲するも要する所は利益を得たいと言ふのが大眼目である、今日株式賣買従事する幾百萬と云ふ數限りのない多くの人士は同じ目的の下に進退して居るが此の目的を貫徹する人は殆んど指を屈する程である、何故に成功者尠なく失敗者多きかと云ふに、

此巧妙なる動搖の中に妙味を捕捉し得ないからで、兎に角難事の中の難事業である、只だ一口に言へば上るか下るかの二道であつて安く買つて高く賣れば必ず儲るに定まつて居るが是れが仲々容易の業でない、若し之れが仕易い仕事であつたら世の中に貧乏人はなからう。

要するに相場將來の高下變動を豫測すべきの明かあれば宿志は達し得られるのである、されば今茲に述べんとする相場高下の素因を知ると云ふ事は重要中の重要で何人も着眼すべき點である。

さて株式相場の動搖する原因を知らんとするには先づ

一、普常の原因

(一般的材料)

一、特別の原因

(特別的材料)

斯の二つの原因であらう、普通の原因とは一般あり觸れたる材料を謂ので、特別原因とは株式市場に現はるゝ一種特別の諸勢力を言ふもの

である此の特別の原因を知ると云ふ事が最も必要である、先づ順序として普通の原因より説き起そう。

相場の變動する根本の原因は論ずる迄もなく、有價證券其物の實價であるが此の實價を離れて多種なる材料により産む所の各人の人氣が原因となりて高下波動を起すのである。

そこで普通特種の材料が人氣を造り、人氣の經過により相場高下の素因となる、此の材料が直接相場其者に關係なく人氣の原因となり人氣が群集心理作用を起して一般的大中小の相場を作るとして見れば勢ひ根本たる材料を知ると云ふ必要が起る、されば普通原因たる一般的材料を左に列記して見れば

一、配當の標準

一、競争による株の影響

- 一、世の中の好況不況
- 一、内國商業の盛衰
- 一、金融市場の狀態
- 一、外國貿易
- 一、財政と株式
- 一、政界と株式
- 一、外交と株式
- 一、農作の豊凶
- 一、天災と事變
- 一、賣買仕手關係

等である、是等の材料が相場變動の原因となり上に下にと波瀾を演ずるのである、樂觀材料は相場の昂騰の動機を造り、悲觀材料は相場の味

を悪くするのである、一概には叙べ難きも、すべて樂悲何れを問はず材料が明らかに知れる頃には既に相場は其反對の行動を採ることがある、开は相場即ち將來を豫想して賣買するが故に相場の變動に影響するは其材料が多く起らんとし又起る事が決定せんとする瞬間に事實となつて相場に現はるのである、要するに樂悲何れによらず材料を早く知ると云ふ事が最も肝要なのである、一般に知れ涉るときは既に遅い感じがあるされば左に項を頒ちて材料を觀説明せん。

一、配當の標準

相場の根本は株券の實價である、實價がなくては相場の標準が立たない、會社の經營方法其宜しきを得、すべての生産により収益を確實に産み出すものは市場の實價は失ふことがない併し配當の多寡により相場に影響することが免かれ、たとへば從來市場にて實價ありと認

められる株券、又た其會社は基礎鞏固であるとも或る事情により配當に減少し若しくは停止するときは當然株式市場に下落は免かれぬ、併し基礎が薄弱でなく収益力の確實なる會社の株なれば長く安直には居ない一時の現象と云ふことに心掛けねばならぬ。

又た之れに反し長年無配當であつた會社が營業狀態一變していよいよ配當すると云ふ場合は必ず其株に俄然昇騰するは論を俟たない。要するに配當と相場との關係は密接なる勢力を有して居る配當の多いは取も直さず會社の營業狀態及び財政狀態が健全なるを證據立て居る最も一概に左うとは論じられない會社の政策上無理の配當をすることがある充分確實に判断を下して相場駆引の一助とすべきである。

二、競争による株の影響

凡そ個人の營業にしても大會社の營業にしても特許を得て營業して居る以外凡ての事業は必ず將來何れの日か競争を受くるのでありて何一つとして競争絶無と云ふ物は恐らく保證の出来るものはあるまい、電燈は勿論瓦斯にも競争がある電車にも競争がある社會の進歩に従つて競争者たる敵が出来るのは止むを得ない、兎に角新たに競争者が出来れば、其事業の収益力を殺がるゝは理の當然で従て其株に打撃を受けるのは論を俟たない。

只だ競争の抵抗力の如何によりて影響する中に大いと尠ないがある故に冷靜なる態度を持ちて觀察すべきである。

三、世の中の好景不景

社會の景氣不景氣が株式相場に大なる影響を來す、景氣挽回は株式相場に活氣を帶び沈滞時代は相場も同じく振はない從來歴史的に徴す

るに此の景氣不景氣は長短の差はあるが循環的になつて居る好景の後ちには不景氣が來る、不景氣の後ちには好景氣となる、斯くの如く循環的性質を俱備して居る、斯の景氣が社會を通じての物價に影響する事は株式相場のみでない

景氣が立ち直る始めは株が動き始め世の中が稍や活氣を呈して來る、既に景氣時期に至れば商工業が盛んになり甲の人も乙の人も事業に着手する新たな會社商店も起り株式市場も般盛を呈し株の相場も寸退尺進の勇を示し騰貴一方にて何處まで昇進するかと疑わしむのである、其他個人會社も擴張する丈け手を擴げ莫大なる資金が固定さる、すべてが信用を濫用し茲に信用膨脹となり、盈つれば缺くる世の習ひ此處が抑も禍機の萌す所にして大景氣の極である、終には生産過多の弊害起り金融逼迫となり貨物不捌けとなり銀行の警戒となる、かくて

七〇

株式相場が第一に下落の動機を起し、金融の關係上或は損失を免がれんとて有力筋の賣りとなり茲に恐慌を來し大暴落を演ずるに至る即ち大景氣の極端は不景氣時代に入るの始めである、株式相場の騰落は世の中の景氣不景氣の先驅と言っても好い、既往十數年の株式相場の高下と對照して視ると如何に此の好景不景を明らかに示して居るか々瞭然するのである、斯くの如く株式に社會の善惡が鋭敏に感ずるは主として金融に密接の關係を有するからである、斯の世の中の景氣不景氣の極端を觀破すると云ふ事は最も必要事中の必要條件である、大正三年の如き極端なる不景氣は既に景氣時代に入るの時機である、大正四年の新春とともに前途一片の光明を認めて眞先きに株式は向上的昇進期に入りた前途益々希望ある時代は横はつて居る。

四、内國商業の盛衰

其國商業の盛んなると不振とは株式相場に影響することも尠少でない國內の商業が盛んになれば人民の購買力を増し商品の捌けを好くし貨物の荷動き多きため汽船及び鐵道の収入を増加す直接間接に拘らず何れの會社も収入を増すが爲め自然利益配當も多く隨て株式も騰貴する兎に角商業の盛衰は最も市場に密接の關係を有する昨大正四年株式の騰貴を見たるは歐洲戰爭により多種の注文陸續として來り商工業の収入を増加し人民の購買力を豫想して益々諸株式は近來になき騰貴を見せたのであつた而して此の商業の盛衰を見別けるには

一、手形交換所に於ける手形の交換高増加するは取引盛んなる徴である。

一、銀行小切手及び手形の不渡所分尠なくなるのも商人の破産者尠

なき現象にて商業盛んなる徴である。

一、鐵道及び汽船の貨物集散の多寡及び乗客の多少等を調査すべき必要がある、貨物乗客の多き時は商業盛の徴である。

一、綿絲の賣行模様、機業地の織出模様、肥料の賣れ不賣等すべて直接、景氣に關係を有するものであれば是等も調査する必要がある、商品の賣行よき際は世の中の景氣宜き徴である。

其國商工業の盛衰を研究すべき特點は先づ左に列擧した如きものなれば是等は充分着目研究の價がある。

五、金融市場の状態

金融と株式の關係は世の中の金融が緩慢になつて資金が純擇となり隨て金利が安くなれば株式の思惑を誘起し株式相場が向上的趨勢となる若し之に反し金融逼迫し銀行の利息が高歩になるときは株券の

下落するのである要するに金利の高低により直接間接に相場騰落を示すのであるが、一概に之れのみを速断する事は出来ない左の條項に注意すべきは勿論である。

- 一、銀行預金の貸出の増減
- 一、通貨及び信用券の流通高
- 一、手形交換の景況
- 一、兌換券の發行高
- 一、國債償還
- 一、外資輸入

等以上の條項を詳細研究する必要がある前にも叙べたる如く世の中に金廻りが好くなれば樂觀材料として株式相場の騰貴を見るに至る、之れに反し金廻りが悪しくなれば悲觀材料となつて低落は免がれな

い。

六、外國貿易

内國の商業と同じく外國貿易も金融界に非常なる影響を及ぼす、すべて外國貿易に逆勢を來し輸入超過が續くときは自然に我國の資金を外國に流出するが爲め株式市場に大影響を來す若し之れに反し輸出超過が繼續する場合は正貨の流入して金融界に當然潤澤となり隨て金利の低落を招き稍や株式界にも活氣を帶ぶるのである、斯くの如く外國貿易の順逆如何により市場影響を及ぼす事大なるのである是れを要すに

- 一、輸出超過は樂觀材料
- 一、輸入超過は悲觀材料

となるのである常に此の市場に出入するものは外國貿易の一點も調

查研究の要がある。

七、財政と株式

國家の財政が如何に株式界に影響を及ぼすかは論ずる迄もない、政府の事業は年々多忙となり隨て國民の負擔は重くなるのみである、斯の税制の如何によりて株界に影響を及ぼす事が大なるので國民の負擔を成るべく輕減せんとする税制を改めれば一般の安心を起し必ず株式相場の騰貴する若し之れに反し租税を増徴せんと云ふ事になれば民間の經濟に壓迫を來し下落は免れない、又た税目の一部酒造税とか砂糖税其他或る一部の税目の改正等により其特殊の株券に樂悲何れが其時の財政に従て影響を及ぼすのである、其他租税の納期、外資輸入、内國債の利拂又は償還等すべて株式相場の一高一低を左右するものとす。

八、政界と株式

政治界の動搖其他法律の改正或は議會開會、内閣の更迭等すべて一舉一動株式相場の變動は免がれない、故に政治季節即ち毎年議會開會中は株式の動搖が甚だしいのに徴しても明白である、法律の制定又は改正は直接に關係を及ぼす、概して内閣の更迭は悲觀材料となる併し代て立つ内閣の如何により好影響となることがある。

九、外交と株式

外交と言へば主として平和か戦争といふ問題である、外交上の成敗は單に人氣上から言つても株式界には重大なる關係を有して居る、外交はすべて戦争を標榜してするものではないが國交將に破れんとする危機一髪には必ず株式に變動を起す若し戦争となると、戦争によつて利すべき株にても一時は下落は免かれない、戦争中は戦況の如何によ

りて非常の變動がある、戦争によつて株券の下落は其國に現金の必要に迫つて現金に替へんとて一般に賣り始むるからである、日清日露の兩戦争にて充分證明して居る、而して戦争終結後即ち平和克復になると相場が上る從來の悲觀が一掃されるからである。

今や歐洲には一大戦争中である若し媾和談判となり平和の曉には貿易は勿論外交上の關係により最も面白き株式界に動搖ある事は今より起持する所である。

十、農作の豊凶

農作物の豊凶は其國の好景不景氣に重大の關係がある隨て農作に不作の際は景氣を引起すことがない、引いて株式相場にも悪影響を招く若し之れに反し農作が良好であれば多數人民の需要力を増し世の中の景氣が好くなる自然株式相場も活氣づくのである、殊に米作は我國

人民の日常必要食料にて毎年五千萬石以上の米を産し之を一石十五圓と見るも七億五千萬圓となる一割減作するときは七千五百萬圓の狂ひを生ずるのである併し豊作が此の兩三年の如く續くときは米價が安くなる爲め大した好況を持たなかつた要するに市價の如何と言ふ事に着目せねばならぬ。

十一、天災と事變

天候を氣にかけ天候の良否により相場に影響するは米相場であるが、株式界にも一概に影響しないとも限らない地震暴風大火疫病海嘯何れも事變天災には一般の株券或は特殊の株券に悪影響を及ぼす災害の大小により社會の景況に重大の關係を有するからである。

十二、賣買仕手關係

仲買と客とは互に親密且つ懇切を計るべきに其實裏面には相嚙相闘

ぐの傾向を現はして居る何となれば仲買は客の注文を呑む事情により素人客の向を張り總買となるときは黒人賣りとなり素人の總賣となれば黒人買となる關係上市場の反對の場面を現出する尤も人氣の集中するは物の極端である、極端なるときは必ず其裏に變せんとする瞬間なれば充分此の理をも斟酌して進退を決する必要がある。

第十六章 相場變動特殊の材料

前各章に列擧したる普通變動の原因材料觀は何れも株式の實價の上
に直接間接に拘らず關係を有し相場變動の主たる原因である、常に此
等の諸條項を腦中に置き以て株式市場駆引の資料とせねばならぬ、此
の觀察眼の明確なる判斷の下に賣買するものは必ず勝を他人に制す
るは論を俟たない、尙ほ又た右列擧したる原因以外株式相場には特殊

の原因を有するのである。

左れば此の特殊材料を説明し賣買上の參考となさん。

特殊材料とは或る特殊の會社にのみ限りて起ることにして例令ば其
會社の營業上の異變により収益の減殺其他基礎の不確實の暴露等す
べて一個の會社の盛衰により其會社の株のみ騰落をなすを云ふので
ある第三十三章に説示したる競争等の類にて特殊に感ずるもの即ち
それである。

例へば米穀取引所の賣買の増減により米株に高低を顯す或は政府の
航路補助案とか造船獎勵等には即ち東洋汽船商船等の舟株は直に好
影響を來す、すべて如斯の例により樂觀材料ともなり悲觀材料ともな
る其問題の好惡と大小に依て其株のみ特殊の原因をなすのである。
併し是等特殊の材料は比較的反應が必ず顯著と云ふ譯には行かない

歴史的觀察によつて視ると相場に立つ株式は同感性を有して居るやうである。開は市人が熱狂時代には或る會社の營業狀態若しくは財政狀態に面白く認められない株券にても他の有力株の昂騰、つれ稍や歩調を共にすることがある。又た之れに反し營業狀態が好良なる特殊の會社がありて市價に當然昇騰すべき筈の株券が外交とか其他一般的材料に壓迫せられ意外に低落することがある。即ち株式相場は同感性を具備して居るもので、兎に角其當時の大勢を達觀することが最も肝要である。

第十七章 人爲相場

相場は人爲と天爲とに依て一上一下なすものにて、すべて大勢は天爲に屬するものである。人爲とは字義の如く或る有力者が自由に高下な

すのである。併し人爲と云ふものは或低度より造り得らるゝものでない、すべて自然に支拂されるものであるが一時は其效をなすことがある。而して人爲的相場に左の區別がある。

一、買占的操り相場

一、客に對する仲買の操り相場

一、反感的操り相場

先づ以上のやうなものでありて、斯の買占による操り相場は多くは一個人にてはやらない。有力筋の幾人かが相聯合にてなすことが多い。相場の昇進程度は其時の實力の如何によるが大抵は全ふすることが出来ない。若し大勢ならずして人爲的買占による騰貴と見たなれば其買占の舉に出でたる翌月反對に賣れば必ず利益を得る。しかし大勢を利用しての買占めなれば其買占は結局成功に終るであらう。兎に角大勢

を達観することが最肝要である。

次に客に對する操り相場、斯の人爲的相場は大なる變動もなき時、材料の如何に拘らず客殺しと稱して常に行はれて居る、たとへば客筋が總買總賣となつた頃、仲買同志が聯合して客の反對に相場を操るのではないが、十中七八までは互に客の注文を呑むで居る、懐ろ關係上期せずして反對に立たねばならぬ故、自然に相場が仲買の思ふ方にあるので、例合ば一般の客筋は總買となつて居る場合は仲買人は期せずして賣崩しにかゝるのである、之れを振落しとか客殺しと稱して居る、大なる變動のなき際は比較的仲買人の思ふ方向に相場あるが常である、しかし熱狂相場には如何に有力筋が出勤するも仲買人が人爲的客に向ふも寸效を奏せない、仲買人は此の熱狂の大相場に出逢ふと莫大なる損失を招く事がある。

仲買人が吞行居をなすのは仲買人の罪ではない、近來客先きに不徳義者が多く利益ある際は何等故障なく勘定を受け取るが一朝損計算となり足の出たる場合は稍もすれば其損失を免れんとて仲買人を苦しめる事が多い、一旦取引所に賣買契約した以上客よりの追敷徴收出來ざる場合仲買人は取引所に對する勘定は怠る事が出來ない、大相場には猶此の如き苦痛は免れない故に自衛上勢ひ客よりの注文を吞まねばならぬのである、然るに熱狂的相場は是等仲買人に幸せず、無茶苦茶に買建たる素人客に左袒し破竹の如き勢ひにて昇進するのである、仲買側にありては一旦客よりの注文を呑みて客の證據金を利用し賣崩さんとて客に向ふも伸力容易に挫けず、止むなく自己に利ならざるに恐慌し終には取引に買繋ぐの手段を餘義なくせねばならぬ、茲に於てか仲買人は一時大なる損失を來すのである、併し黒人の黒人たる所以

は一時金庫は空虚となるも早晚仲買人の勝利にするのである、开は一般の人情として上げれば何所までも上る如く猫も杓子も買ふより外に知らない、すべて人氣が陽の極點に達せば必ず陰に復するは天理の然らしむる所である、即ち相場の極點を觀破し以て縦横に進退を決すれば必ず最後の勝利を得るのである。

次ぎは反感的操り相場である、是れは素人客が一時大儲けして一夜成金になり濟ました場合其客に反對に向つて賣買するのである、即ち其客の反感的態度に出られるのである、是れ等も仲買人が言ひ合したる如く期せずして反對の舉に出らるゝ爲め折角の成金も終りを全ふしない事がある、之れとても大勢には敵しない、却て憎まれたる一人に左袒して多數の者が返り討ちになる事がある、兎に角此の取引所市場には外觀の思ひ及ばざる特殊の習慣がある、株屋町より米屋町には一層

甚だしい。

第十八章 株式賣買の時機

既に章を重ねて株式界に於ける須要の點は理解説明した心を苦しめ腦を痛めて株式に投資するも皆な金を儲けんの目的である、斯の株式相場に従事する幾百萬の人士は一樣の目的を懷きて日夜腦漿を苦しみつゝあるが成功者は殆んど十指を屈する程もなく之れに反して失敗者は數ふるに違がない、何故かくの如き現象であらうか、开は論ずる迄もない他人の知らざるうちに機に投じ得るものは必ず成功する機に投ずると云ふ事は最も至難の業であつて、凡眼にては到底思ひ及ばぬ事である、然らば如何にして機に投ずるか、开は他なし、株式相場の新智識たる駆引を巧みに操縦するものにて、言ひ換へれば株式賣買の極

意を知り以て大中小の機會を捕ふる方法である、今茲に理解説明せんとするは駆引の極意即ち賣買の時機を捕ふる手段方法を叙べ賣買者の好参考に資せんとす。

凡そ相場界の機會なるものは常にあるべきものでない又た眼前にないとも限らない、機會は時を定めて來る者でもなく電光石火の如く瞬間に來り瞬間に逸し殆んど捕捉するに苦しむのである。

たとひ株式相場に限らず如何なる事業にも機に投せずしては成功するものでない、況んや變化常なき株式相場は尙然りである。

されば是れが機會に投じ他人の知らざる妙味を捕捉せんと欲せば賣買の時機を知ると云ふ事が最大必要條件である故に先づ買時機より説示して見やう。

一、買ふべきの時機

賣買の時機を知るは凡ての商業の極意である、即ち安く買ひ高く賣るは商内の律にして株式相場の如き變動常なき者は尙さら必要事である、今茲には株式の買入時機を説示せんとす幸ひ熟讀玩味して市場駆引の資となすべきなり。

前にも叙べたる如く機會は常にあるべき者でなく時を定めて來る者でない電光石火の如く瞬間に來り瞬間に逸するのである而して此の機會に大機會、中機會、小機會と三つに區別することが出来る大機會とは一年若しくは數年間に涉りて幾度もない、中機會は一年を通じて數度はある小機會に至りては日々眼前にあるのである、左れど此の小機會は容易に捉へ得べきものでない、機會は大いなる程捕へ易く又た妙味に至りても最も多いので、換言したなれば此の大機會に投じて賣買するときは必ず成功は保證し得るのである。

二、大機會

九〇

大機會に乘じ巨萬の富を造らんと欲するには時機を待つと云ふ事が最肝要である一月は愚か半年乃至一年でも焦らず待たねばならぬ此の待つと云ふ事が洵に第一必要中の必要である株券により一定確實の収入を得るに止まらず時に應じて之れを賣り資金を増殖するに於ては其時の氣に向いたから買ふとか直段が安いとか配當が好いとか只だ定見なく買つてはならぬ。

又た市場に買聯合が起り衆人は將來騰貴を見越して買進み其他根據淺き材料に附和雷同し是れ等に提灯つけて買つたり乃至は尻馬に乗つて騒いではならぬ斯くの如き時機は決して妙味あるものでない他人の恐れて買得ざるときこそ妙味深々たるので古句に人の行く裏に道あり花の山といふ名句がある畢竟するに他人の買はざるときに買

へとの句に外ならぬ。

此の大機會の買時機は世の中が長く不景氣續きにて株は漸次下落一方で何人も株に手出せず確實な株も下落のみにて殆んど何日回復す可かと疑はしむの際相場は安直底に沈み世の中は不景氣の極に達し其株が實價以下に崩落した時は即ち買時機である。

又た相場が安直底に沈み數ヶ月間は其儘の形勢を持續し何人も買ひ得ざる所が千載一遇の買時機である即ち相場沈靜の時機をも切り抜けて其直段を保つ株は必ず安全なることを暗示して居るのである。

又た市場沈靜にして取引さらに振はず久しく安直に持合ふとか或は實價以下に下落して市人の注意を拂はざる株が市場に幾分活氣附き始め其他の株券すべてが日々取引商の増加せんとする形勢を呈するときは是ぞ絶好の買時機である而して買ふべきの前には先づ左の事

を吟味ねせばならぬ。

一、當時の相場が底直であるか或は下落中途であるか否やを判断せねばならぬ。

一、買ふべき株券は市價が健全に保たれて居るかを調査研究せねばならぬ。

一、現今の市場は景氣回復すべきや、又た幾分活氣附くも一時的現象にあらざるやを研究せねばならぬ、

以上の諸要點を冷靜に判断して誤りなきやうにせねばならぬ、大機會の時機は右の諸要點である次に中機會の事を説くことゝしよう、中機會と雖も何れも斟酌して活用すべきである。

三、中機會

中機會は一年を通じて數回ある乃至一ヶ月の中にも時々あるのであ

る即ち大機會中に胚胎する所の機會を云ふ投機的放資者として最も此の機會を巧みに捕へねばならぬ、今茲に中機會による買時機を示せばこうである。

株式市場が好況時代に入り昇騰の後ち何等之れと認むべき動機もなきに市場倦怠を顯はし一般厭氣を生じ投げたる後ちは必ず買ふべきの時機である、また財界が良好に向ひつゝある、年にても尠しの材料に刺戟を受けて俄然下落せば相場の停止状態を示すときは買に妙味がある。

又た相場が回復時期に入りて昇進したものが再び軟調を示し以前の安直を底近くまで下落して其後活氣を帯びて來るときは透さず買はねばならぬ。

すべて久しく持合た後ち相場に動搖し始め隨て賣買の數を増加し漸

次昇進の機運に入りたと見れば速やかに買ふべきである、先づ中機會を利用して株式買入時機は如上の如くであるが尙株式買入に對し一般的買時機其他を説明して見やう

一、如何なる株券を問はず從來下落のみ呈したるものが一の材料を得て市價騰貴なしたるが何等の材料もなく利喰賣りのために一時反動安を演ずる事あり而して日ならず再び好調を示すときは安全なる買場所なり。

一、久しく實價以下にありて多く市人の注目をせざる株券が急に昂進するときは必ず何れかの潜勢力を有するものである、故に反動的安直のあるを待ちて徐々に買ふべきの方針を採るべきなり。

一、營業基礎其他財政の整理改革等を敢行せんとする會社の株式は其整理案の發表を待ちて、冷靜に調査研究をなし確實なりと斷定を下

すことを得ば速やかに買ふべきなり尤も斯くの如き株券は充分慎重の態度を持すべきである。

一、從來賣買高尠なく市場沈靜であつたものが幾分回復の兆を呈し、同時に株の賣買高増加の趨勢を示すときは將來よく動くと思ふ株券を買ふべきである。

四、買ふ可からざる條

前章には株券の仕入れ即ち買ふべきの時機を説明したが物には買ふべきの時機と買ふべからざるの時とある株式思惑者のために聊か買ふて不可能なる條項を簡單に擧げて参考に供せんとす。

凡そ定期市場にて富を致さんと欲するものは吳々も急いでは不可能である靜かに時機を待てば必ずや買ふべきの機會は來るものにて又た市場の風説人氣に迷ひ或は新聞の諸説を信ずることは失敗の因を

なすのである。

彼の大手筋とか有力筋は吾人の思ひ及ばざる駆引策略をめぐらし或は買聯合とか或は買占めとかを表面に誇大に言ひ振し株券の直段を釣上げ騰貴させとん謀り以て自己の持株を賣逃れんの手段を弄することあれば兎角大手に附和雷同することは慎まねばならぬ。

亦た數ヶ月に涉り昇進を續けたるものが後ち高直にて持合ひ若しくは急激に高騰したるときは決して飛付き買をしてはならぬ其他常に成績不良の株券が他の株につれ實價以上に高直を演じたる時も又た買ふべからず。

次ぎに營業の基礎不良の會社が一定の經常費を差引き尙ほ是れと云ふ配當の出來ざる會社が増資又は社債を發行するの意志明瞭なるに至らば斷じて買ふ事は不可能である猶二三略記して見れば、

一、久敷上り或は急激なる昇騰をなしたるときは近きうちに必ず反動安がある。

一、整理改革等によりて一時人氣の引立てる株は日ならずして再び軟弱になる。

一、久しく實價以下に低落して悲觀せられし株が急に回復して昂進を見せる時は近き將來にて反動安がある。

一、何れの株を問はず以前ありし高直近邊まで昇進するときには縦ひ昂進すべき相場にても一時下押しすることあれば必ず其意を以て進退を決すべきである。

五、賣るべきの時機

凡そ何れの商業を問はず商品を賣らんとするには成可高く賣りて多く利するの目的は論ずるまでもない、商買の奧義は仕入れにありと云

ふ諺がある元より仕入即ち買入の方法如何にもあれど此の賣るべき時機を観るも又た大切である、買時機と賣時機と相待ちて以て全ふせば必ず大利を得るや必せり。

而して株式相場の如きはなるべく高き天井を賣ることに心掛けねばならぬ、しかし斯の高直たる天井を賣ると云ふは多年従事する黒人さへ至難にて殆んど出來得ないと言つても好い、相場天井と言ふ事は甚だ見極め難いのである、假りに相場が以前の高直を打ち越へて倍々新高直へ昇進したら既に天井近くなつて居ても、未だくくと云ふ慾心が手傳つて終には絶好機會を取逃すことが再々あるのである、株を持ちて居るか乃至は買つて居ものは層一層此の慾心がかぬ爲め最好時機を捉ふことは不可能である亦た買時機を失ひたるものは最初は恐怖心の爲に買得ずして日々昇騰のみ演ずるを見ては、たまり兼ねて天

井間際にて買建て以外なる損失をする。

次ぎは賣るべき時機を覗つて居るものも健實なる相場の歩調を見ては仲々容易に賣れない恐怖心にかられ是又た賣時機を逃すが常である。

斯の時機にも大機會と中機會とあるが是れが區別するの要を認めない只だ賣ると云ふ問題は高い所を賣ると云ふ目的であれば成可高い所を待つて勇氣を振るつて賣るやうにせねばならぬ、今左に賣べき時機を列記して見やう。

一、數年來寸退尺進的の歩調を以て昂進し日々高騰するのみにて一般市人の恐怖が變じて大樂觀となり何人にも株さへ買へば儲るやうの形勢となり市場に大中小の成金黨を出し取組高も最多額に上りたるときは火に飛入る思ひにて盛んに賣るべき時機にして是れ

即ち賣るべきの大機會である。

一、財界の裏面に何か怪しむべき形勢を認めたるときは眼前如何に好材料を言振らするも心を動かされず勇氣を振つて賣るべきである

一、先づ株式を賣らんと欲するときは前途の大勢を達觀するを要す現今の景況は好景に向ひつゝある中途なるか既に好景氣の極點であるかを觀破せねばならぬ若し景氣に向ふ中途と見れば少々位いの悲觀材料が起るも焦急に賣るべき必要がない兎に角慎重なる判斷の下に敢行すべきである。

一、大勢の推移によりて向上趨勢を示せるか乃至は例年の騰貴季節によりて昇進して居るものかを判斷せねばならぬ最大不況後の昇進は既に大勢の昂進期と見て誤りはない、社會は尙不景氣を脱せず只だ季節により昇騰しつゝありと觀破せば人氣沸騰したる所を待つて賣るべきである。

一、金融緩漫より相場騰貴一方に傾き財界膨脹の極點に達し緊縮時期に移らんとする際は必ず賣るべきである又た熱狂相場を演じ大沸騰して今一段騰貴すると思ふ頃は勇氣を賭して賣るべし。

先づ賣るべきの時機としては以上數項に説きたるが如きなれば充分實地に對比して方針の一助とすべきである、尙ほ賣方針につきて一々注意すべき事を擧げんに

一、市場に買占説とか強固なる材料を流布し是れ等買方は市人の人氣を誘起して相場の釣上げ策を講じ稍や昇進したる所を見計ひ持株を賣退かうとする策略をなすことあれば彼等の動靜に迷はざるやう却て是れ等を利用して賣るやうにせねばならぬ。

一、一時的の材料により俄然崩落することあるも慌てゝ突込賣りをし

てはならぬ、材料丈けの下落を演せば再び好調を示す者なれば、兎に角將來を達觀して方針を定むべきである。

一、市場に根據なき流言又は噂に迷ふて持株を賣つてはならぬ種々惡辣なる傳説を流布して悲觀材料を造り持株を賣らしめんと他人を欺く事あれば、吳々も其眞想を確めづして賣ることは注意すべきである。

第十九章 鞘取り賣買

株式相場には鞘取り賣買とて極めて安全なる收利方法がある、損失をなすが如き事は斷じてないが利益は少ない手段と方法に依つては餘程好い利廻りとなる。

斯の商内は賣る時機も買ふべき時機をも要せず勿論時を撰ばず直を論せず二六時中安全に賣買して半歩的に利殖する方法であつて此

の鞘取賣買は我國特有の商内法である。

定期には兼て説明した如く當限、中限、先限と三期に區分してあつて當限よりも中限、中限よりも先物と順次高いのは普通である之れを本鞘と稱すので又た逆鞘とて此れに反し當限が高くして中先に從て安いのがある、此れ等は利子の勘定又は配當の加減により本鞘ともなり逆鞘ともなるのである、この三期の直開きを鞘と言つて居る即ち此の直鞘を巧みに利する方法に外ならぬ。

如何なる方法によるかと言ふに、當限りの安き所を買ひ先限又は中限何れにても高い所を賣るのである例へば

當限 四十一圓

中限 三十八圓八十錢

先限 四十四圓十錢

第十九章 鞘取り賣買

右は大正五年六月二十四日の臺灣製糖新株の大引直段を示したのであるが、中限は當限に比して安い故に中限の三十八圓八十錢にて買ふものと假定し、買建つると同時に先物の四十四圓十錢を賣れば此の間一株につき五圓三十錢の利益ある勘定である、十株に五十三圓、此の中、賣と買との手数料四圓四十錢を支拂ふとして四十八圓六十錢と云ふ利益を得る中限に買ふたものが來月末に三百八十八圓を支拂つて實株を受取り一ヶ月の後も先限の納會に其株を渡せば茲に結了して以前の四十八圓六十錢と云ふ相當なる利益を得るのである。又逆鞘を利用する方法があるが、是れ等は株式放資者が徒らに株を持ちて遊ばさず運用するに好い方法である、併し逆鞘となる場合は配當の關係にて逆鞘となることが多い故に餘り好んで賣買すべき方法でもないが左に述べて見やう。

當限	九十五圓四十錢
中限	八十八圓七十錢
先限	八十八圓九十錢

右は大正五年六月二十七日の臺灣製糖の寄付直段である先づ此株を持つて居る人が當限の高い直で賣つて同時に中限なり先限にて買ふので、其月末で現物で渡し先限なり中限なりにて買つて居るものをその期月の納會にて受取ればよい、併し前にも言つたる如く配當の加減にて逆鞘となるのであるから餘り好ましい方法でもない。又た場所を替へて鞘取り賣買の方法がある、たとへば同じ株券にて東京と大阪の取引所によつて直段を異にして居るもの、

東京にて	五十圓
大阪にて	四十五圓

こう云ふ直開きが假りにあるとしたれば東京の五十圓を賣り大阪の四十五圓を買ふのである、一見單純なやうであるが、之れは素人として容易な業でない、すべて物價は何れの取引所も平均ならんとして假りに今日右のやうな直段にて大引せば明日は大阪が高く、東京が安い茲に於て全く直開きがなくなる、東京大阪との電話にて連絡が充分採れる黒人でないと出来ない仕事である。

要するに斯の鞘取り賣買は

- 一、成可く直鞘の廣きものを選ぶこと
- 一、賣と買との手數を要するにつき手數を引き充分好き利廻りとなるものを選ぶこと

以上の二條件を胸算して賣買せねばならぬ。

第二十章 熱狂相場に所する法

如上各章に於いて株式相場のすべての順序は理解説明した、是れより相場賣買に對するあらゆる駆引其他のことを述ぶることにせん。

株式相場が普通小賣商内の如く單純なる賣買に止まらば左したる變動もないが、すべて定期と名のつく相場程變化百出のものはない、地から天に上るか天から地に下る程の大變動を起し又た眠むりしか死せしかの觀を呈することがある何れも群集的心理作用による人氣によつて起るのである人氣程偉大なる勢力を持つて居るものは他にあるまい、日清、日露大戰後には驚くべき最高直を顯はし一昨年秋の最安直との直段は殆んど七八割以上も直段の差がある、如何なる常識の判斷しても、かくの如き變動の理由があらうか、是れ皆な人氣の力によつて

絶ず波瀾を起して居るのである。元より採算もあり實價の標準もあるけれど、有價證券以外の書畫の如きも人氣によつては偉大なる高價に賣買せらるゝのである。大相場小相場、或は日々の小變動にてもすべて人氣に由て定まつて居ると言つても過言でない。

彼の常規を脱する熱狂相場の如きは人氣の大沸騰して居るので、市人が熱狂に驅られて買進むときは採算もなければ實價とも没交渉である。

古人も熱狂の前には經濟上の原則なしと言つて居る。

若しかくの如き大相場に際會したれば、先づ斯の相場は何程位いまで騰貴すべきかを豫測し、假りに三百圓方上ると豫定が付けば二百五十圓見當まで買方針を立て、其以後は決して買ふてはならぬ寧ろ、人氣の大極點まで靜かに待つて賣るべき考へを起すやうにせねばならぬ。

熱し易きは冷易しと言ふ諺がある。熱狂的昇騰したものは一朝人氣の極點に達して下げ汐に向ふと下落も甚だしい。すべて是迄騰貴に依つて成金を出すも此の反動の下落に今迄儲けたるものは盡く損失して元の木阿彌となつて仕舞やうである。

從來歴史的觀察に依つて觀ると一度昇進期に入れば騰貴も早い。が最高直を造り即ち天井をなして下落に向ふと一瀉千里の勢にて下落する。古人の

一、天井一日底百日

の金言に外ならない。是れを充分味ひて進退消長の一とすべきである。又た熱狂相場に賣買何れか仕掛けんと欲する時は左の如き方法を以て仲買店へ注文するを可とす

一、今日或は明日何圓より何圓までの範圍に寄付き又は引直あれば

買つて呉又は賣り

と以上の如く範圍を定めて注文せざる時は以外なる高直を買ひ若しくは大下寄等以外なる安直を賣込の懼れがある、前後の事情を考察して是れなれば出逢ふと豫め成算を立て、賣買注文すべきなり。

第二十一章 中相場に處する法

大相場は數年の後一回位いよりない、斯の大相場中に胚胎する相場を中相場と言ふのである、而して此の相場の機會を巧みに乗じ得たならば期せずして大機會たる大相場に乘じ得らるゝのである。すべて眞の致富成功の秘決はこの中相場を利するを以て第一となす、中相場にあつても特別の原因はやはり人氣であつて人氣の素因は賣買者の勢力範圍より起りた者である、予の常に主張する所は物價の高

低は材料に依るは勿論であるが只だ要は賣買兩者の勢力に外ならぬ即ち賣人が多ければ相場が下り之れに反し買人が多ければ上る科學的説明せば需要供給によつて起るのである。

相場の騰落はかくの如く賣人と買人の人氣勢力に外ならないが、人氣とか勢力を見出すは却々容易のものでない。

普通の相場眼に映する人氣は殆んど反對に視へると言つても過言でない、慾心の手傳とうのみならず自己本意に流れるが故に斯く映するは無理からぬことである、

左れば如何なる方針を懷きて賣買に處すべきかと言ふに

一、第一に大勢を觀察して置いて將來下落の趨勢は免かれないと豫測し得たならば、すべて賣るべきの方針を採る事が第一要件である、若し前途必ず昇騰すべき者と觀破したならば只だ買一貫の方針を守

り多少の悲觀材料が顯はるゝも動せず慌てず冷靜に進退を決すると云ふ事が肝要である。

一、次に昇騰下落に拘らず賣買兩者の人氣勢力を測ると言ふことは最も必要中の必要である、併し此の豫測とか觀測と云ふ事は神ならぬ凡人には甚だ至難のことであるが、從來高下した所の直段は何れも人氣勢力によりて一高一低して來たものである故に以前の高下を參考として將來を測ると云ふのは最も好いことである、景氣不景氣も循環的の者なら相場の高下も循環性を有して居る、或は根據淺い説と見る人もあらうが舊を尋ねて新しきを知るのは歴史的觀察として是れより他にはない、後葉に述べたる野線により賣買を決する方法を翫味すれば會得するであらう。

以上の二者を常に心掛けて進退駈引を決する時は蓋し誤りも尠ないと信するのである。

第二十二章 天井底直觀察法

凡そ如何なる商業にても高い所を賣り安直を買ひ其間の利を得ると云ふが商法の律であるが、口で言ひ得べくして實地に行ひ得べきものでない殊に變化波瀾に富んだ株式相場の高下は尙然りである、天井を賣り底直を買ひ度いと言ふのは人情の然らしむ所であるが是等は當底出來ぬ話である、株式放資の眼目は元金に疵の付かぬやう從て利益の大を謀る目的であれば敢て天井を賣り底を買ふの妙技は要しない、若しかくの如き上手をせんとせば必ず誤りがある是に供ふに失敗は免がれない。

好く泳ぐものは水に溺るの諺がある上手にせんとする施設は却て下

手となる、只だ安全に利せんとするには天井を賣らず底買はず。

一、即ち天井の峠を越したる下り阪より賣り、底を済ましたる上り道より買始む。

のが最安全で何等の苦痛も要しない、然らば天井を突き底を入れたる上り道は如何にして觀察を下すべきかを研究せねばならぬ、すべて天井と名づけ底と言ふも皆な過去の直段を差して言ふので賣人買人の人氣勢力の變稱である、人氣の最強點を天井とし、人氣の最弱所が底を造たのであるが故に此の人氣の理勢を解し人氣を利用して天井と指し底と歸納するのである。

されば茲に於てか人氣の性質を知らば自然に天井済ましたるか底を入れたるか、明瞭する譯である、前にも叙べたる如く人氣は眼に視へるものでない、故に形ちのない人氣が作りたる相場の直段を標準として研究するより他に道を求むることが出来ない。

人氣の消長は陰陽に循環し陰と陽とは極所より變化する、たとへば陽の極所たる最強の人氣は既に陰に復さんとするので之れに反し陰の極は將に陽に替らんとする瞬間である、而して人氣は左の定則がある。

一、人氣は先き走るもの

一、人氣は人氣を産む

一、人氣は跡覺へのもの

此の三つの者を理解したならば必ず天井近きか又は天井済ましたか底直近きか或は底直入れたるか、明瞭するのである、先きに説きたる天井の峠を越したる下り道、底直を済ましたる上り道を觀破するには即ち人氣は跡覺たることを充分理解し得たならば觀察し得らるゝのである。

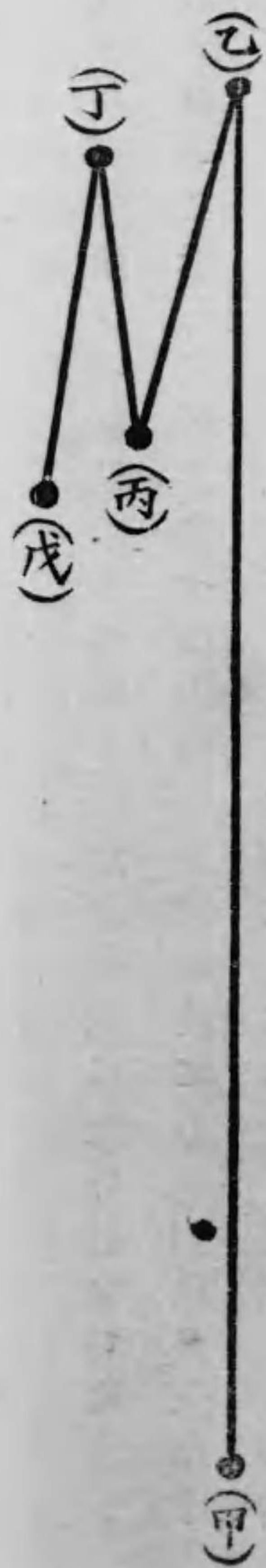
一、人氣は先き走ると言ふことは、たとへば或る石油會社が新たに石油井戸を發見したと云ふ材料があれば井戸が果たして多くの石油を産出するや未だ疑問の中に既に其會社の株は一の樂觀材料となり前途を見越して買進む故に相場も從て好調を呈す、いよゝゝ事實に於て顯はるゝも其割方に買はない、即ち人氣が先走りして其材料丈け人氣一ぱいに買つたからである、すべてが斯くの如く先走るものであれば只だ未然の中に人氣の素因たる材料を知ると云ふことが最も肝要である。

一、人氣が人氣を産むと云ふことは既に天井或は底近くなりたる際に起る現象である、例令ば或る鑛業會社が大なる炭鑛を發見し其鑛脈は實に無數であつて黄金は瓦石の如く産出すると言ふ材料があれば未だ其眞想をも確めないで其株券に衆目一致して買進む、相場の昇騰につれ倍々誇大に言ひ振らし輪に輪をかけて流布する即ち人氣が人氣を産むの言ひである、斯くの如きは既に天井近き相場と云ふ事を暗に示して居る、すべて人情の弱點は茲にある、相場が上れば何所までも上る如く思ひ下げれば無價にもなる如く思惟するが常である、此等人情の弱點を利用すると云ふ事は又た相場成功法の一端である。

一、人氣は跡覺へのもの、百人よれば九十人以上の失敗者を出し成功者の尠ないと云ふは人には弱點がある、從來買方針に依て利益得た人は相場の上る事を知つて下る事を知らない又た賣りにより利益を得た人は賣る事を知つて買ふ事を知らない、かく論せば極端なる言葉であるが相場其者は一上一下なすと言ふ事は知らない者はないが買ひにより利益を得た人は樂觀材料は耳に入り易く悲觀材料

が頭にはいり嫌い、此の弱點が跡覺へとなるのである。たとへば或株券を五十圓にて買ひ僥倖にも五十五圓となり六十圓となり順次昇進して利益を得たと假定したなれば、一旦利益を得ると同時に相場も利喰其他により軟弱となり此の軟弱は押目と見て再び以前の利益を得た味覺へによりて一般の市人は買ふ故に再び昇進の步調を示すが相場は上るのみでない人氣の極たる陽氣盡くれば天井を構成して下落に入るのである。斯の味覺によりて買ふ所が跡覺へと言ふので、而して跡覺であるか押目の買場であつたかを觀破すればよ

第七圖



い是れを圖解して見れば上圖の如くである即ち

第七圖は(甲)の安直より(乙)まで昇進した(乙)にて利喰其他によりて(丙)まで下げたが、以前買によつて利を得た市人は(丙)にて再び買進む故に(丁)まで相場が上進したが、元來陽氣の盡きたる相場は(乙)の高直たる以前の人気勢力に達しないで(丁)を二番頭として漸次(戊)に向つて下落する即ち(丙)より(丁)に向つて上る所が跡覺へである(丁)より(戊)に下落せんとする所が賣るべき最安全の直であるこれぞ

天井の峠を越したる下り道

である、歴史的觀察法によれば何れも此の跡覺相場を作りて天井をし、之れを反對の状態が底を濟ました上り道となつて居る、かくの如き見易き點に千載不朽の妙味が存在して居るのである。

材料は人氣を造り人氣は相場を構成する即ち相場動搖の素因たる人

氣を利用すると言ふ事は斯界成功の第一要義である、されば如上に説明したる點に翫味研究せば期せずして安全なる場所を賣買し他人の知らざる妙味を捕捉し得るのである。

尙天井と底入れの状態を参考として述べんに、前にも言つたる如く人氣が相場を造り相場は人氣を造りて相離れず高下するものである、人氣沸騰して誰れも彼れも買より道なきやうに思ふて買進み從來なき大なる直巾の昇進を視せて後ち尙は強堅なる人氣に拘らず俄然急落を呈することあり是れは既に陰に覆さんとなす前提であるが高直覺へにより再び好調を示す是れ燈火將に滅せんとするに及び忽然其光りを増すと同様である是れが跡覺状態となれば斷乎として賣るべきである。

又た之れに反し強氣は投出し市場の人氣は極端に腐れ猫も杓子も賣りより外なしと思惟するときは既に陰の極である、而して腐れ切つたる人氣にも拘らず忽然急に上進し再び軟弱となるも下しぶり其割方に下落せず材料待ちの如き状態を示すは既に底入れの兆である。

第二十三章 月始めの賣買方針を定むる法

月始めの事を新甫と言つて居る字義の如く新たに甫むの言ひにして三ヶ月後に受渡しなす株券の契定が始めて先物と云ふ表題にて生れるのである、兼て論じたる如く、すべて賣買の人氣集中するは此の先物にあるのである故に斯の先限を標準として理解せんに、新甫月始めの方針を定むるには

- 一、氣配によりて方針を定むるものと
- 一、人氣々勢によりて方針を定むるものと

一、直段を標準として方針を立てるものと

の三種ある、すべて相場は理外の理によりて高低を演ずるものとしてある、开は樂觀材料が出で、却て其樂觀を好き賣場とし、之れに反し悲觀材料を得て却て相場が昇騰することがある要するに高下が不可解である故に此の言葉が出たに外ならぬ。

相場界に處し前途の方針を定むるに材料本意、人氣本意、野線本意、早耳其他干支占等種々あるが、元來利益を得る目的であるゆるに其目的たる利益さへ得る方法を講じたら好い、今茲に述べんとする月始めの方針を定むるに右の三種によりて賣買を決する資料を説示するのである、さて氣配によりて方針を定むるとは月末納會後立會前まで氣配と云ふものが市場に喧傳せられて居るすべて氣配は人氣の結晶したもので暗に其相場の方向を示して居るのである、斯の氣配は誰れが定め

たと云ふ譯ではないが相一置するものである、例令ば上鞘に生れる氣配とか下鞘の氣配と其時の相場趨勢によるのである、そこで氣配を標準として前途の趨勢を説示せようである。

一、氣配が上鞘に生れると言つて居るに實地の相場は却て軟弱にして下鞘に生れる如きは賣り方針を採りて好い若し之れに反し下鞘の氣配が變じて俄然上鞘に發會するときは充分買餘地のある暗示である。

一、大上鞘の氣配にて實地も其氣配より尙は高く發會する時は一時は高直を顯はすも多くの上直なく天井近き相場と見てよい、しかし其相場の位置を見るを要す相當昇進して斯くの如く大上鞘に生れるときは或は新甫當日天井を出現せんも計りがたければ其意を以て進退すべきである、之れは大上鞘に對する駆引を示したものである

が大下鞆の解釋は之れに反して消長を計ればよい。

一、市場に傳はる氣配と何等替らないで發會するときは、人氣々勢及び直段標準を參考として賣買を決するがよい。

次に人氣々勢を以て方針を定むるには新甫當日若しくは發會後の相場の成行によつて賣買を決するのであつて、是を理解すれば先づ左の如くであれば充分實地と對比して爾後の研究資料となすべきである。

一、すべて新甫の氣勢は一方に行くものである、例令ば強硬なる相場状態を示せば四五日乃至一週間位ひは續いて昇進の歩調を示すものである、是れに反して人氣々勢が軟弱であれば同じく四五日若しくは七八日間は従つて相場も安いのが常である、即ち月末より賣買を手控へ月替より賣買せんとて新甫待ちに待ち、發會と共に或る有力

者其他一般の出勤を見るため月始めの氣勢を一方に現はすのである、其時の趨勢材料により直巾を測定しがたきも相場の上に停止状態を顯はすと同時に相場に轉換を來すのである、(停止状態の解は野線の部に詳かなり)

○、納會に比して發會が高く生れるとき猶ほ買の餘地がある而して七八日頃まで高いときは其後月の二十日過ぎ迄安いのが順序である、月末には強硬なる状態を現はすを常とす。

○、發會とか納會より安く生れるときは四五日は尙ほ安いのが常である而して安直停止暗示を現はすときは昇進歩調を示す若し昇進期が短かい時は月の大勢軟弱である永く好調を呈するときは一時押があるも大勢は強硬と見て誤りはない。

次ぎは直段を標準として方針を決するのであるが前にも叙べたる如

く材料其他人氣等により無形が有形の相場を作りたものなれば直段を標準として方針を定むる方法を説示せんに。

一斯の直段を標準としての賣買を決するには材料を見づ人氣に附和せず只だ一高一低する直段のみを視て方針を定むるのである。先づ第一に發會したる直段を基點として其直段より二圓方上れば買ひ二圓方下れば賣るのである。即ち二圓高下に附從して賣買を決するのであるが、相場は必らずしも二圓上れば將來昇騰すべきものと定規的定まつて居るものではない、されば左の條項を斟酌して進退を決せねばならぬ。

第一、二圓高下に附從して後ちは生れ直より高下直巾を終始視て居る必要がある、從來高下したる直の半數強も反對に相場が演じたなればドデン賣買をするのである。

第二、新甫發會後數日に涉りて相場が持合となるときは其持合中の高安直巾の中心より二圓五十錢方に附從するのでたとへば持合中の直巾の中心を終日定めて置き此の中心より二圓五十錢方上れば買ひ二圓五十錢方下れば賣るのである。

第三、新甫發會の直段は常に記憶する必要がある數日後に於いて此の新甫發會の直段より二圓方も抜く方向に月の大勢はあるものである。

先づ月始めの賣買方針としては斯の如きであるがすべての法則を固守し何等外觀に耳を措さず斷乎として賣買を決するときは誤りも尠ないであらう。

第二十四章 大勢に從て賣買を決する法

相場道により致富成功するの第一要義は大勢に従ふにある、大勢に順守するものは勝ち逆ふものは必ず敗るの金言がある、併し何人も大勢に逆ふ事の悪しきを知り大勢に従ひたきは一般に希望する所であるが其大勢を觀破するの明なく又た之れを觀るべきの法を知らない、免に角大勢を知ると云は最も難事中の難事と言はれて居る、然れども是れが方法によりて觀るときは何等六ヶ敷いものでない。

されば大勢を觀破する方法を述べて賣買を決するの一助となさん、材料とか人氣又は新聞の所説を最一の參考資料として賣買を決するは甚だ早計である、材料とか人氣は一般の市人に同やうに感するので、すべての材料其他あらゆる者が斟酌されて始めて相場の上に顯はるゝのである、然らば相場の高下したる直段は何れも是等の結晶によつて造りたものと假定せば、相場を動かすべき素因は盡く含まれて居るの

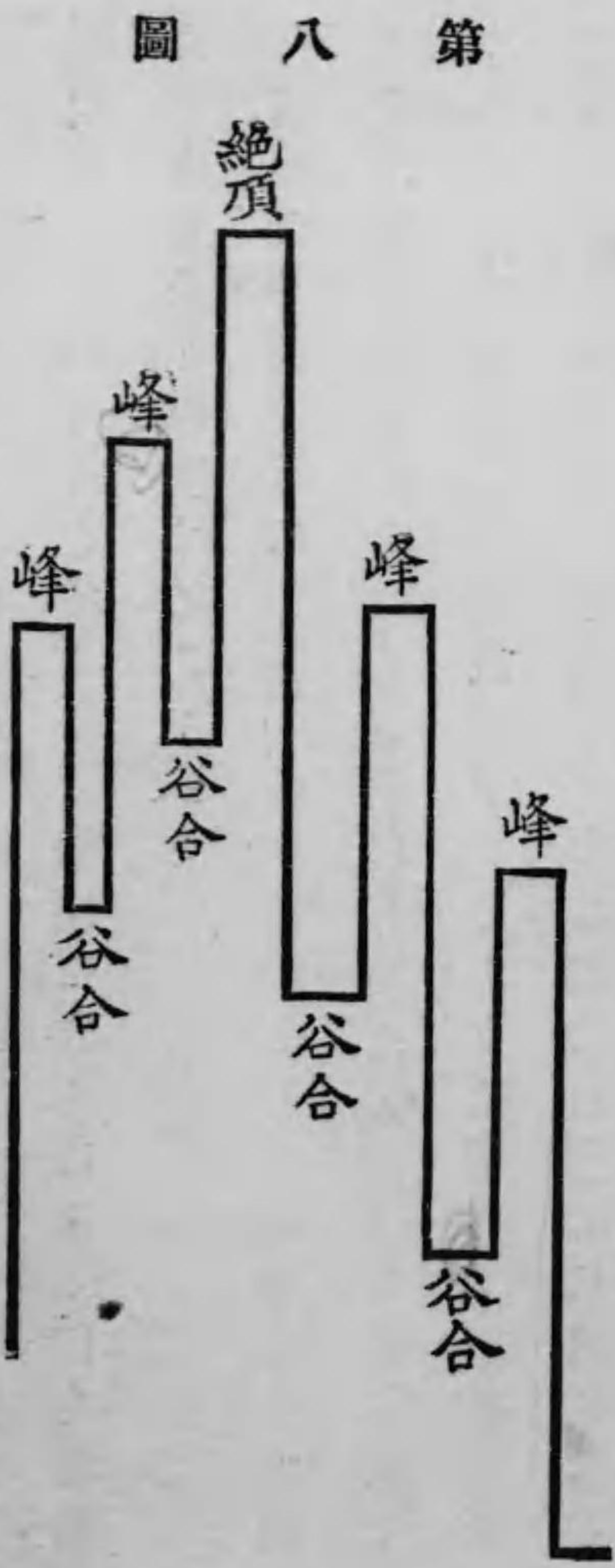
である、故に相場を目的とする以上相場其者に大勢を聞くより他に道はない、株式ではないが、米相場の金言に

口には言はず耳に聞かず目に視ず

と云ふ警句がある、是等は株式相場に適用す時は最も好い金言である、相場により利せんとするには相場に問ふにある、即ち既往の相場状態により將來を推理するのである。

相場の大勢高下は恰かも一の山の如きである、山にも大山あり小山あり或は嶮山あり軟山がある相場も殆んど相一である、假りに高野山に登らんとせば或は昇り或は下り殆んど縦横に上下して始めて絶頂に達するのである、此の絶頂に達する迄には三山八峰八谷を上下するのであるが第一歩の麓より足を運びて八峰を昇り八谷に降るも以前の麓よりは必ず高いのである上に昇り再び谷合に下るも此の谷底は以

前の谷底より必ず高い相場も必ず此の通りであつて山を昇る勾配も或は降る勾配も相場の高低も何等異なる事はない圖に示せば



第八圖は山の形ちになつて居ないが道順を略圖したのであつて

以前の谷より次の谷が必ず上にある斯くの如くして絶頂に昇るのである、相場の大勢を達観するも此の谷と峰とを常に標準として相場の高低が故ふる方向に逆はずに賣買せば好い。

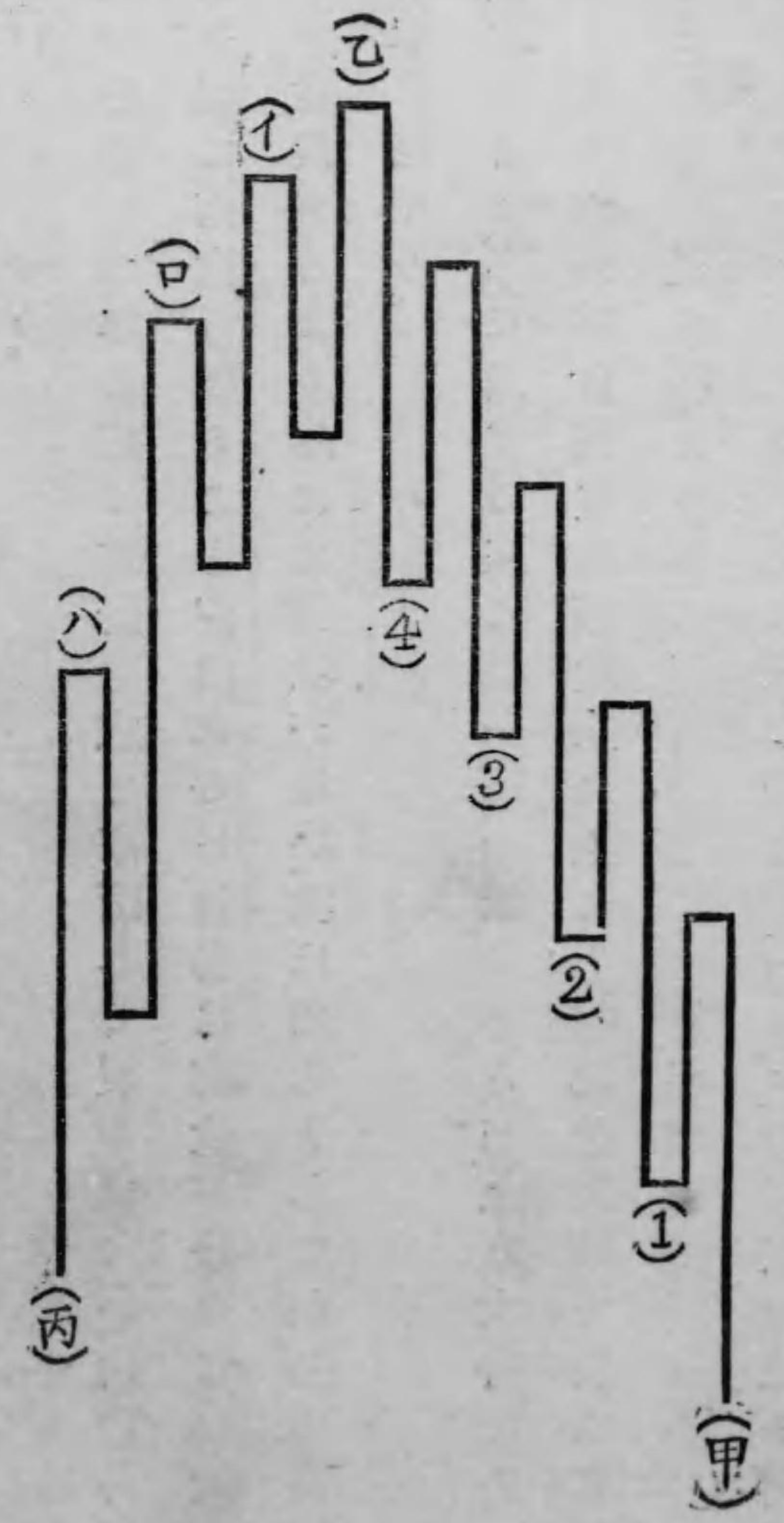
- 一、昇り大勢の際は谷合即ち押目底のみを注視するのである。
- 一、下落大勢の時は峰即ち戻りの天井のみを標準として方針を定めて行くのである。

この二つの者を標準に観て方針を立てば断じて誤りはない、山の昇降は肉眼を以て前途も視ることが出来るが相場は前途が分らない故に此の理を當籤めるより他には方法がない、猶ほ参考として相場の高下を圖解して見やう。

第九圖は(甲)より(乙)に達する迄には一高一低はあるが上げ大勢である故に(1 2 3 4)等の押目底直は順次上に上にと勾配を附けて居るに注目せねばならぬ、又た(乙)より(丙)に下落するには是亦高下波瀾はあれど(イ)の戻り天井を(ロ)の天井が上に抜き得ない(ハ)は(ロ)の高直を抜き得ないのである、幾年以前に逆上り相場の高直を見るも皆な此理を脱して

居ない、斯く如く視易き點に着眼せず種多の材料臆説を附會するが

第九圖



爲め折角分るべきものを自ら不可解なり不可能なりと絶叫するのである、甚だ杜撰なる引例ではあるが理に於ては何等替りはない充分實地につき研究すべき事を希望して止まず。

第二十五章 持合相場に處する法

相場の高下動搖中持合状態に入ることがある、賣人買人の勢力により一高一低するうち強弱兩者の疲れ或は需給の動搖なき際に起る者であつて相場持合に入るときは市場寂寞を極め諸人退屈にて相場を馬鹿にするに至り殆んど波瀾停止したるかの觀を呈するが其實不動靜寂の極は又大いに動搖すべきの機會を孕みつゝあるので古人の靜極まりて動を生ずる素因と言つて居る油斷なく其離に従つて賣買を決すべき時機を狙ふべきである。

相場激動の末若しくは株式實價面に引き附けられ持合状態に入るのであるが、先づ持合に入るときは好調に見へて漸次堅實に昇騰するが

再び軟弱を呈し或は突飛して高安に拘らず以前の新直を見せると同時に又々今迄の反對に高下する即ち高下の足取が亂調にて何等秩序がない最初大巾に高下したものが後ち小巾に往來するやうになり市人倍々静寂を感ずは既に持合離れの動機が熟さんとするのであれば離れに従ふて賣買するの用意を要す而して持合相場は天井持合と底直持合と中間持合の三つがある。

一、天井持合

一、天井持合は相場が相當なる日數と直巾の昇進して意想外の大昇騰したる後ち急激に四五圓方も下落し其下落したる近邊にて持合相場は既に天井打ちたるものと觀て誤りはない、

又た大昇騰の後ち亂調的高下持合を示すも天井持合と記憶して進退駆引を要す。

二、底直持合

一、底直持合は數ヶ月下げ來りて急に昇進を顯はし最安直の先きにて持合す二三圓方上にて持合を現はすは既に底直持合とす。

又た株式の實價以下にて持合は必ず底入れ後の持合と記憶すべし

三、中途持合

一、中途持合即ち上げ相場下落相場に拘らず中間にて持合ふ事にして此の中途の持合はすべて末端に持合ものである例令ば上げ相場なれば昇騰したる高直近邊にて持合は必ず前途再び上に岐るべきを示して居る之れに反し下落相場が安直の末端にて持合時は尙一段の安直あるものである。

以上の如く持合は三つある何れの持合に入るもいよく相場持合と視れば賣買何れか建株あれば一旦手仕舞をし其離れに従つて賣買す

る事に心掛ければならぬ、而して數日間持合の後ち極めて高下少なき最少の直巾を示した當日を動機と名づけ大抵翌日に一の材料を得て分岐するものなれば最少直巾を造りたる日があれば漸々出動の準備をなすべきである。

而して是れが仕掛くべきの方法を理解せんに持合相場に入りたる當日より持合期間の高下直巾を記憶して置き次ぎに持合中高下巾の中心點をも記憶して若し、數日間持合の後ち先きの中心點より持合中の直巾を上へ造れば買ひ下に下落せば其所より賣るのである、稍や覆雜なれば左に改めて説明して見やうなら

⑥ 持合中の直巾三圓三十錢と假定し

持合中の中心直五十五圓と假定すれば其の

中心直五十五圓より三圓三十錢上りたる所より買

中心直五十五圓より三圓三十錢下りたる所より賣

如上の四條項に依て賣買を決するときは安全なる所を買ひ又は賣りて利するのである、如何なる持合に論なく此の方法により實地に活用すべき事を勧告する。

第二十六章 直取引相對賣買

已に株式賣買に對し説明して來たが是れより直取引の方法を説明して見やう直取引は字義の如く直ちに現物を取引するを以て本意とするのであるが市場には殆んど現物の取引をなすのは稀である、前に叙べたる如く前場の止め直を以て損益を決する者にて、立會は前後場の二回ある而して前場の寄付は諸株立會の十分以前に立會ひ前場引直は十分後まで相對に賣買するのである、立合時間中は間段なく賣買

が出来て一々直段を異になす左の如き状態より實行せられつゝある
ので此の間の賣買により成立する直段を歩みと稱して居る。

買人(成行)(六十錢)(五十五錢)(成行)(成行)(六十五錢)(七十五錢)
賣人(五十錢)(成行)(成行)(六十五錢)(六十錢)(成行)(成行)

- 1、
- 2、
- 3、
- 4、
- 5、
- 6、
- 7、

右の如く賣人は五十錢にて賣りたし買人は成行にて應じ初めて五十
錢と云ふ直段が成立した之れを以て寄付直段となすのである。そして
寄付と引直は競賣買にて定めるのである。競賣買とは何錢買つた成行
賣つた何錢賣た何錢買たと幾人もが競り合ふて初めて其中間の直を
取引所審判官が木を入れると居つて拍子木によりて定めらるゝので
東京取引所諸株立會の方法と同一のものである。次に(2)六十錢にて
買ひたい成行にて應じ斯くの如く相對に幾度も賣買手合せが成立す

る(2)3456はそれである。此の間の直段は前にも言つた如く歩み直
と稱へる(7)の七十五錢を以て引直と定めるので前場の引直は爲替と
稱して居る。

斯の直取引は以前は東京株式の新株を主力株として盛んに行はれた
が四十四年五月農商務省より禁止せられた。現今は日本郵船株同新株、
南滿新株鐘紡新株寶田石油甲號五分利公債等である。すべて賣買の最
低數は株は十株國債は五百圓と定められてある。

此の直取引は前にも叙べたる如く株式立會の十分間以前に立會はれ
株式立會の氣配を比較的よく示すものである。大引後にも又た引跡相
場と云ふものが立つ其方法は殆んど眞の相對で株は主に寶田石油株
である。前に言つた如く寄付直段と大引直は競賣買になり其間幾回も
相場が延べつ幕なしに動く賣買の出来る度毎に賣買の高は記されな

いも一々札が掛けられる、寄付より引直迄に再々直段に小波亂ある爲め素人客は比較的失敗者が多い、又た此の直の相場を利用し仲買店が自由に人爲的操ることが多い、そのみならず此の歩み直を悪用して客の注文を誤間化す事が多い之れを「下駄を穿くと云つて下の如き手段を弄す或客より成行にて賣り注文せられ七十錢で賣つたと通知して其實八十錢にも九十錢にも幾分高直で賣るので此間少しの直を嗜着する公然の秘密として行はれて居るのである、併し金銭上及び賣買の點に至りては是れ程堅いものは他にあるまい如何程大なる取引も一點證據となるべき書付は交附しないも此間何等の間違が起らない相場以外には見られざる現象である。

第二十七章 直取引の計算

直取引賣買は前にも叙べたる如くすべての終了を前場引を以てなすのであつて此の前場引の直を爲替相場と稱して居る、この爲替直段を標準として損益の計算を完了するのが通常である。

其計算方法は爲替直段を標準として此の直より安く買つた場合は其差金丈け利益となり、高く賣つた者も同じく其差金丈け利益となる若し之れに反し爲替直段より安く賣り高く買つたものがあつたら其差金丈け損となる譯である此の差金を頭金と稱して居る。

而して此の前場引直を以て轉賣買戻しは是非せねばならぬと云ふ譯でもない數日間自己の見込により捨て置くことが出来る、併し其場合は日歩と云ふものを拂はねばならぬ、多くの場合買方より支拂ふのである何故日歩を支拂はねばならぬかと云ふに、直取引は定期と異り現物の受渡しを直ちになすべきが目的なれど實際は其受渡しをしない、

そこで買方は現物の代金を賣方に支拂ふ代りに預け金といふ方法を以て其代金に對する利息を支拂ふのである一般新聞の相場欄直取引の部に日歩何錢と記してあるのがそうである、而して逆日歩と稱して賣方より買方に向つて猶豫料といふ意味で支拂がある是等逆日歩或は日歩のことは賣方と買方の資金の都合上現物受渡しの關係次第によりて定めるものとす斯の日歩を定めるのは月番幹事會とて直取引場立連により定めらるゝのである。

前にも述べたる如く前日の後場より賣買したるものが今日の相場引の爲替直段にて解決しない場合一日延ばせば一日分の日歩を要し二日延ばせば二日間の日歩を支拂はねばならぬ、而して此の延ばしたる期間に直段の高下は直接賣買者に關係を及ぼすのであつて、例令は今前場中に郵船株を二百壹圓にて買つたと假定したものが今日の爲替

直段にて轉賣せず又た明日の前場引直にも其儘とし其翌日の爲替直段にて初めて轉賣したものとし其標準直段たる爲替直は二百五圓と假定したなれば此の差金一株に付四圓の利益となる、斯の利益の内より手数料と日歩二日分とを支拂へばよいのである。

如上の如く至極便利に出來て居る而して前場の爲替直を以て取引計算を完了し後場の大引直迄に五圓内外も高下する場合は大引直段にて臨時に賣買の計算をすることがある之れを二度勘と稱して居る即ち一日に二度勘定するが故である、尤も此の場合は利子の受授はないのである。

第二十八章 直取引賣買注文の仕方

前章にも説明したる如く直取引は賣買結了が迅速であるから隨て損

益の計算も速やかである普通株券の注文と異なり此の注文をなすには自身自づから市場に出場して電光石火の如く縦横に注文するやうにするが最も當を得て居る或は電話便にて油断なく駈引消長せねばならぬ前にも叙べたる如く幾日にも見込次第により轉賣買戻しせざる場合は利息の計上さへすればよいのである巧みに賣買すれば小資本にて能く大利を得ることが出来る前章に書いた如くこの取引にては定期取引の賣買報告書及び其他何一つの書類は交附されないも此間何等の忌まはしき間違はない只だ信用づくの取引である。直取引すべての事は只だ單に如上に示したる位いの事であつて他に是れと述ぶべき事はないさて此の直取引の賣買も市場にては盛んに行はれて居るのである。

されば斯の直取引の必勝法を二三解説を試み尙ほ具體的方法は他日専門的に公刊すべし。

第二十九章 直取引翌日の高下を

豫知する法

前章に於て委しく説明したる如く直取引は契約の期間が極めて短少であるから翌日の相場即ち大略の高低を知るの必要が切に感ずるのである故に今茲に理解して見やう翌日の高下を知るには左の事を先づ記憶する必要がある。

一、本日より三日以前即ち前々日の後場より昨日の前場中迄の高下直巾と(イ)

一、前日の後場より本日の前場中の高低直巾(ロ)

この二つの直巾によりて本日後場より明日前場中迄の高下を豫測す

るのである、前者を假りに(イ)と附號し後者を(ロ)と假定し而して

(イ)と(ロ)との直巾を對比するのである、例合ば(イ)の直巾を標準として置き(ロ)の高下直巾が(イ)の高直より、新高直を現はし安直は十錢も下直なれば、後場より明日前場中は尙強勢たる暗示である、若し之れに反し(イ)の高直を抜き得ずして安直は却て新安直を示すは明日の前場中は尙弱勢である。

而して(イ)の直巾に(ロ)が高直も安直も抜かず其中間にあれば前日後場寄付きより本日前場の引直高ければ尙強勢と見る、安ければ軟弱と思惟して賣買を決すべきである、左に圖解すれば



第十圖の如く(イ)の直巾中に(ロ)の直巾が中間にあるが前日後場寄付より本日前場引が高く引けて居る故尙は高

い暗示と見てよい、併し之れを以て百的百中と速断するは大なる誤りを生ずるが十中の八九は斯の如く豫測して誤りはない、要するに既往の實地につき研究し以て將來の參考に供するがよい。

第三十章 直取引賣買必勝法

前章には翌日の高下を豫測すべき方法を述べたが之れが賣買必勝法を俱體的に説明して見やう、實地に對照して充分自信を得た後ち實地活用して必勝を期すべきである、斯の方法は市場に行かなければ實行出来ないのである、開は寄付より引までに相對により賣買手合の出来る直段を一々野線に明記せねばならぬからである、左に一例を示して實地活用方法を述べんに、例合ば

寄付 二百九圓

第三十章 直取引賣買必勝法

- (1) 二百九圓八十錢
 - (2) 二百十圓
 - (3) 二百十圓五十錢
 - (4) 二百九圓八十錢
 - (5) 二百十圓二十錢
- 引 二百十圓九十錢

寄付と引との中間(1 2 3 4 5)は何れも相對によりて出來たる直段と假定し此れを野線に示して見れば

第十圖



再び堅實なる歩調になつた即ち(5)の二百十圓二十錢にて買ふのであ

第十一圖の如く引くのである、是れが實

地活用法を説明せん、先づ寄付より(1

2 3)と昇進して(4)に下押したが(5)にて

る若し(5)にて買へない場合は引の十圓九十錢にて買つても遅くない、斯の方法は直段の付くものを標準として賣買を決するのである、左に圖を以て賣買方法を示して参考に供すべし。

第二十圖



第十二圖の如く(甲)より(乙)に上り(乙)より(丙)に下押して(丙)より(丁)に昇進せば是れにて買方針を探るのである。

第十三圖



に譲ることになす。

第十三圖は(甲)より(乙)に下げて(乙)より(丙)と上げたが(甲)の高直に達せず(丁)と下落したる所より賣るのである以上の兩圖を縦横に活用すればよい此の以外の事は聊か複雑なれば他日

第三十一章 阿部式大勢引野線法

二十四章に於いて大勢に従つて賣買すべき方法を説明したが茲には野線本意により大勢を觀破し巧みに機會に乗ずるの法を述べんとす先づ野線の描引法より順次述べん尙ほ本法は前著株米大勢測定口傳に詳かである。

一引方

此の引方は前場寄付より後場大引までの直段を日々幾月間にても相連続して引くのであるたとへ寄引以外に如何なる高直安直あるも一切引かないのである而して之れを三圓高下に從つて引くものとす左に一例して見やう。

一日 寄付 二百五圓 大引 二百五圓五十錢

二日	同	二百八圓	同	二百七圓二十錢
三日	同	二百八圓七十錢	同	二百十三圓
四日	同	二百十圓十錢	同	二百九圓八十錢
五日	同	二百十二圓	同	二百十三圓二十錢

先づ五日間にて右の如き直段ありと假定したなれば左に野線を圖示せんに

一阿部式三圓高低引

第十四圖



第十四圖は最初二百五圓を基點として六圓五十錢、八圓まで三圓以上の直巾を造りたから相連續して引く八圓より七圓二十錢まで下押ししたなれど直巾八十錢よりなし故に引かず次ぎは八圓七十錢、十三圓と昇進した故に十三圓まで引く十三圓を頭として四日大引九圓八十錢まで下落した此の直巾三圓以上ある故に九圓八十錢まで引き再び五日十三圓二十錢まで昇進した故に其直まで引く上圖はかくの如く引いたのである、寄引以外如何なる高安直段があるとも引かないのである、又た寄付引直と相連續して引く内三圓の屈曲を付けなるときは、それを捨て、引かないものとす。

二活用法

引方としては極めて單純なのであるが是れが容易に大勢を指示するのである、而して賣買すべき要所を説明せんに

第十五圖は(天)より(甲)に向つて下落したものが(甲)より(乙)に昇進し後ち再び(乙)より(丙)と下落した、なれども(甲)の安直を下に廻らずして(丙)より三圓方昇進したる
×印の所より買ふのである。

第十五圖

第十六圖は前圖を反對に示したものであつて、即ち(底)より(甲)に向つて昇騰し(甲)より(乙)と下落したが再び(丙)に向つて上りた、然れども勢力弱くして(甲)の高直を抜き得ずして(丙)より三圓方下落したる×印の所より賣るのである。

第十六圖

若し(乙)より昇進して(甲)の高直を(丙)にて新高直を顯はして後ち軟弱に

なるときは(乙)と(丙)との中心直より二圓方下りたる所より賣るのである。前圖もかくの如く(乙)と(丙)との中心直より二圓方上りたる所より買ふのである。

賣り或は買ひ何れにても法則によりて賣買したときは次ぎの法則が出るまでは利入れ轉賣買戻しはしないやうにせねばならぬ。

第三十二章 陰陽日足引の秘訣

野線にはすべて材料は勿論人氣勢力何れも含有して居るのみならず買人賣人の潜んだる勢力を暗に示して居る。偶々野線を馬鹿にして曰く、野線は前途の觀察し得べきものでない、從來賣買したる戰略の歴史のやうなものであつて何等の效力があるべきものでないと批評するものがある、并は甚だ誤りたる考へである、即ち之れが活用方法を知ら

ないからである、決して野線は無味單純なるものでなく、充分機會を示し妙味あるものである。

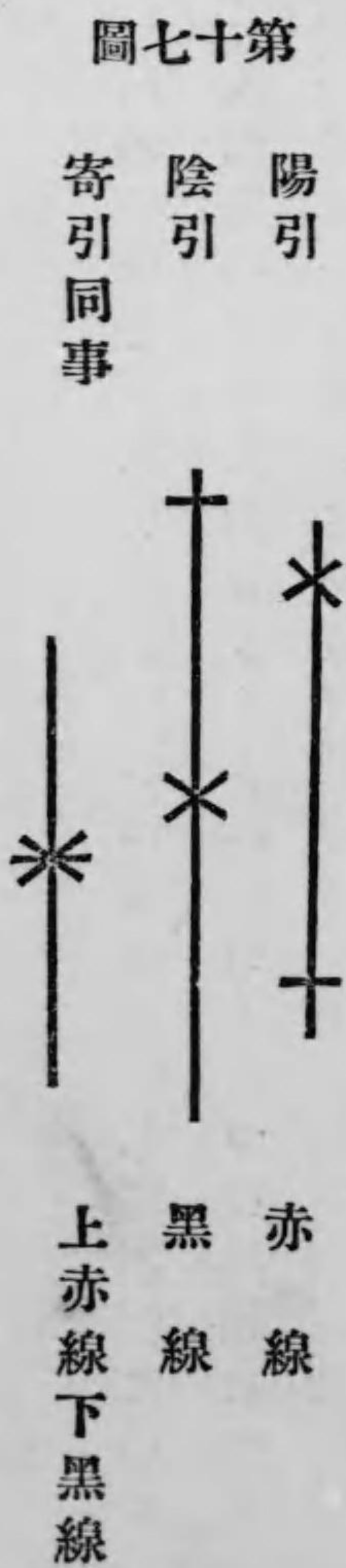
今茲に述べんとする陰陽日足引は日々高下する所を左の方法によつて引くものとす。

一 引方

引方は一日中の高下直巾を棒狀に引き寄付と大引を明瞭に示すのであつて

- 一 前場寄付より大引高きときは陽引と稱して赤線に引く
- 一 前場寄付より大引安きときは陰引と名づけ黒線に引く
- 一 寄付は一印を以て明瞭に記す
- 一 大引直は×印を以て定め置く
- 一 寄引同直なるときは高直は赤線安直は黒線にて引く

以上の五要點にて引方は明瞭した筈である左に一例圖を示して參考に供すべし即ち第十七圖の如きである。



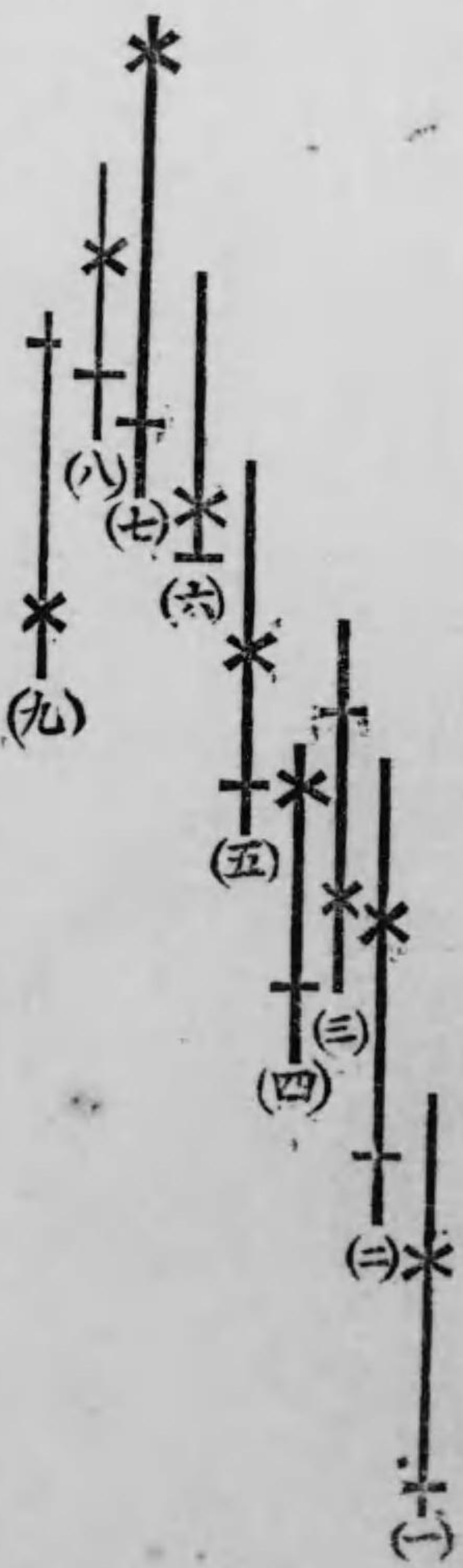
棒狀は一日中の高下直中に寄付と引とを記して日々相連續して引くのである。

二、活用法

引方が明瞭せば是が活用法を指示すべし此の引方によつて相場陰境と陽境を視る從來昇進したる相場が陰境に入りて初めて賣り方針を採り之れに反し下落相場が陽境に入つてより押目買方針を以て進

退するのである陰場の境界を視る方法は相場騰落に従つて引きたる中陰陽引を標準となすのである昇進相場の一例を左に圖を以て指示して見やう。

第十八圖

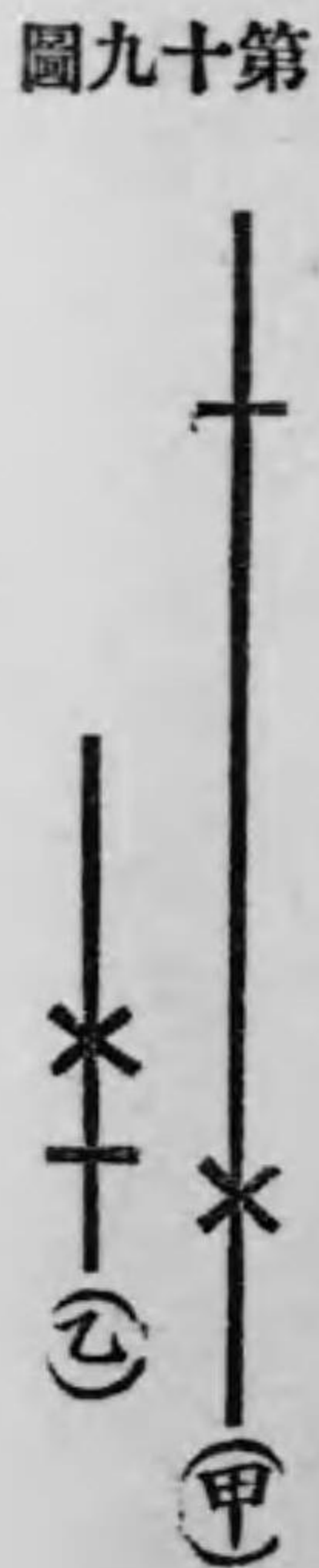


第十八圖の如く(一二三四五六七八)と昇進の步調を辿つた(七八)は陽線である(九)に至つて(七八)の陽線より相場は下についた即ち陽の境を抜きて相場が陰境に入りたのである故に(九)の線より賣り方針を採るのである下落相場は之れに反するものとす。

すべて昇騰相場は以前の陽線をのみ標準とし相場が陰境に入ると同時に賣り方針を採り若し陰境に入らざれば幾日にも買建の儘にして賣ることは禁物である、又た下落相場は陰引の棒を標準として其の陰引の分を抜きて陽境に入りて初めて買方針を採るのである、而して標準とすべき陽陰の線はなるべく直巾の廣きものを以て標準となすときは誤りが少ないのである。

三 停止暗示

此の日足引によつて相場高下一端の停止を視ることを得るのである、前日の高安直巾中に今日の相場が胚胎するときは停止暗示と見て誤りない、若し此の胚胎する前日の高直を抜けば買ひ安直を抜くと同時に賣ればよい



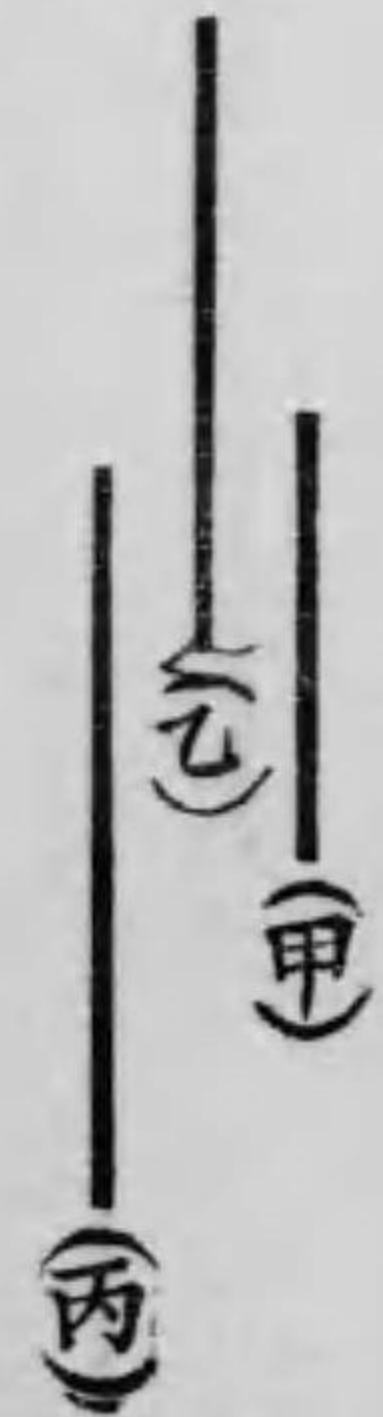
第九十圖

即ち前圖の如きを言ふ
相場が下落して第十九圖の如きは一時戻りを演せんとする者にて即ち安直停止と見る、若し昇進したる後ち前圖の如きは高直停止と推察するのである、兎に角(甲)の高安を標準として賣り方針を定めればよい、(甲)の高直を抜きて買ひ安直を抜くと同時に賣るのである、直取引にも活用し得るも妙とす。

四 天井暗示

此の日足引により天井底の暗示を示すことがある。

第十二圖



ときは乙線を標準に置き(乙)の高直を抜きたる後ち買ふも遅くはない

第二十圖は相場昇騰の後ち(甲乙丙)

とかくの如く状態は天井の暗示で

ある、若し天井せず再び強勢を示す

第廿一圖



第廿一圖は相場下落の後ちかくの如き形状は底直暗示と観るのである、若し底直とならず再び軟弱なるときは

(乙)の安直を下に廻りて賣ればよい。

第三十三章

阿部式高下直巾測定法

凡そ株式相場に指を染むる人士は相場將來の高低直巾即ち歸着すべき天井及び底直を知ちんと欲するは最も痛切に感ずる所ならんも、變化に富む所の株式相場の高下直巾を測定するは最も至難の業である、現時すべての科學は日進月歩と共に驚くべき發達をなすも未だ相場界の天井底直を確實に豫測する方法はない、今假りに斷乎として誤

りなく測定し得る方法ありとせば財界の大王となるも易々たるのである。

今茲に述べんとする方法は百發百中は的中せざるも十中八九は正確に豫測し得るの法である、元より斯界從事者の參考として叙述するものなれば是れが細説は前著期米株式天底直巾測定極秘によれば明瞭すべし、さて直巾を測定するには勢ひ數理に依らざる可らず予が發見創定したる本法も數理を根據としたるものであつて、先づ左の測定原理律を活應用するものとす。

一、測定原理律

天底原理數

一、一八二五

押目戻原理數

一八二五

補助原理數

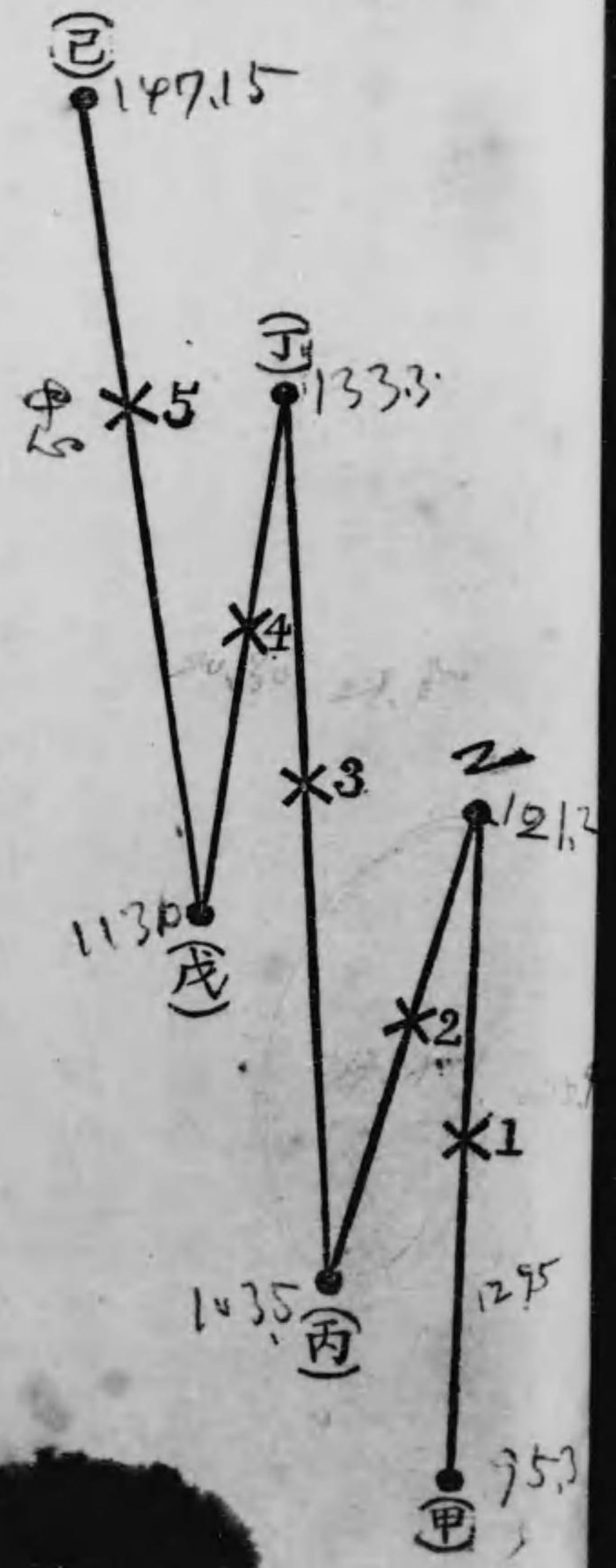
三六五

右の三原理數を活用して將來の直巾を測定するものにて、而して將來の直段を測るには既往の高下したる直巾に右の原理數を活用するのである、次に凡て大勢下落狀態か若しくは昇騰相場なるかを觀察して置く必要がある、若し大勢昇進相場であれば、天井より押目に入りたる下落直巾によりて將來の天井となるべき直巾を測定する、押目の底より天井迄の直巾によりて押目下落直巾を豫測するのである、下落相場は之れに反し戻りの直巾によりて將來の底直までの直巾を測り、戻り天井より底直までの直巾によつて前途戻りの直巾を豫測するのである。

次に既往の直巾の中心直を常に記憶して置く必要がある先づ一例を以て説明して見やう。

一、昇進相場測定法一例

第廿二圖



第二十二圖の直段表を示せば

- 底 (甲) 九十五圓三十錢 此の直巾二十五圓九十錢
- 天井 (乙) 百二十一圓二十錢 此の直巾十七圓七十錢
- 押目底 (丙) 百〇三圓五十錢 此の直巾廿九圓八十錢
- 天井 (丁) 百三十三圓三十錢 此の直巾二十圓三十錢

押目底 (戊) 百十三圓

天井 (己) 百四十七圓十五錢

(x) 印は中心直

$$\begin{array}{r} 1825 \\ 25 \\ \hline 16925 \\ 9125 \\ \hline 3650 \\ 472675 \end{array}$$

一六四

2530
12540

(甲)より(乙)に上げたる直巾によつて(丙)の押目底を測定するのである。先づ甲と乙の直巾を見るに二十五圓九十錢なり此の直巾に押目の數たる、一八二五を乗する時は答四圓七十二錢となる(x1)の中心直百八二十錢より此の答を引き去れば押目の底を得る即ち百三圓五十二なり

丙の押目が測定し得て實地ありたるものと假定せば次ぎに(乙)より(丙)に下落した押目の直巾によりて將來の天井となるべき直段を測定するには(乙)と(丙)との直巾十七圓七十錢に天井の原理數たる一、一八二五を乗するときは答二十圓九十二錢を得る故に(乙)と(丙)との中心直たる

(x2)の百十二圓三十五錢に加へるときは百三十三圓二十七錢を得る是れ即ち未來の天井となるべき直巾である。

此の(丙)より(丁)まで上げたる直巾により(戊)の押目底を測定し得る(甲乙)の直巾により(丙)を測定したる同じ方法によれば答百十三圓を得るなり

(丁)より(戊)に下落したる押目の直巾によつて(己)の天井を豫測するには(乙丙)の直巾により(丁)の天井を豫測したる方法と同一の下に測定せば答百四十七圓十五錢を得るなり

如上一例したる如く以前の高下したる直巾に前記の原理數を乗じて中心直より、押目は中心直より引き天井は中心直に加へるのである、而して下落相場を測るには此の法を反對に應用すればよい。

一、即ち戻り上げの直巾に一、一八二五を乗じ中心直より答の直を引

くときは底直を得る。

一、下落したる直巾に戻りの律、一八二五を乗じ其答を中心直に加へるときは戻り天井の直巾を測り得る。

而して補助律たる三六五は是又た以前の直巾に乘じ其答を

一、高直より引くときは戻りの直段を得る

一、高直に加へるときは第一の天井直を得る

一、直安底に加へるときは押目底を得る

一、安直底より差引けば第一の底直を得る

右の如く四つの働きをなすのである、而して如上に理解したる測定方法により計測し目的の直段に來りて左の定則に依つて次ぎの計量に移るのである。

二、變化定則

變化定則とは前述の方法により計量し目的の直段に來つて次ぎの計量に移るのである、即ち相場場の轉換を知るものにて即ち左の直巾の移動によつて次ぎの計測に移るものとす。

大極範圍は十圓巾

大範圍は五圓巾

中範圍は三圓巾

尙ほ相場は寸厘の差異なく計量し得るものでない時には行過ぎとなり時には測定したる直段に不足して天井又は底直を入れる事がある要するに本法は行過ぎ又は不足範圍は

測定したる直巾の十圓巾に對し八九十錢の範圍と定めてあるたとへば前途五十圓方昇進する計量と假定したれば、四圓五十錢内外は行過ぎ又は不足するも何等法則には誤りなきものと見做すのであ

る、已に如上に於いて説き去り説き來つたれば既に計量方法は知悉した事と思ふ尙詳細に至つては前著期米株式天底直巾測定極秘を一讀せば直ちに明瞭すると同時に活用自在なるべし。要するに法は凡て活用する人の額によつて其妙味を發揮されるのである。

第三十四章 高下足取に従ふ必勝法

物の變化は手の裏を返すやうに變るものではない必ず前提とか前兆のある者である雨が降らんとするには天が曇る日の入、日の出もそれ〴〵前兆を顯はすのである、相場の高低變化も必ず前提があるが、慾と云ふ雲に包まれ其前兆を觀破することが出來ない、材料とか人氣は又た容易に判斷が出來ない、強弱の材料も視る人の心に依て強いと弱い

とも斷定ができる、かくの如くであるから相場は理外の理とか、難事の中の難事と世人の腦裂を痛めるも無理からぬ事である。

すべての材料其他人氣を包蓄してある相場其者に従つて賣買するものが最も策略を得たるものと思はれる。

從來研究して視る所に依れば如何なる足取を罫線に描引して見るも大同小異殆んど相一致して居る、小は小丈けの規則を存し大は亦た大なる定則の下に一高一低して居る、つまり眞理に至りては何等異らない、一般用ひられて居る毛拔とか門とか種多の名稱を附するも皆な何等か依るべき所がある、併し只だ形狀のみを論じて人氣勢力が暗に示し居る事を説かないために識者に認め得られないのである。

今此の章に於いて説示せんとする高下足取に従ふて收利すべき方法は買人賣人の勢力を足取によつて前知し巧みに賣買を決するのであ

る、便誼上左に圖を以て説明することにせん。

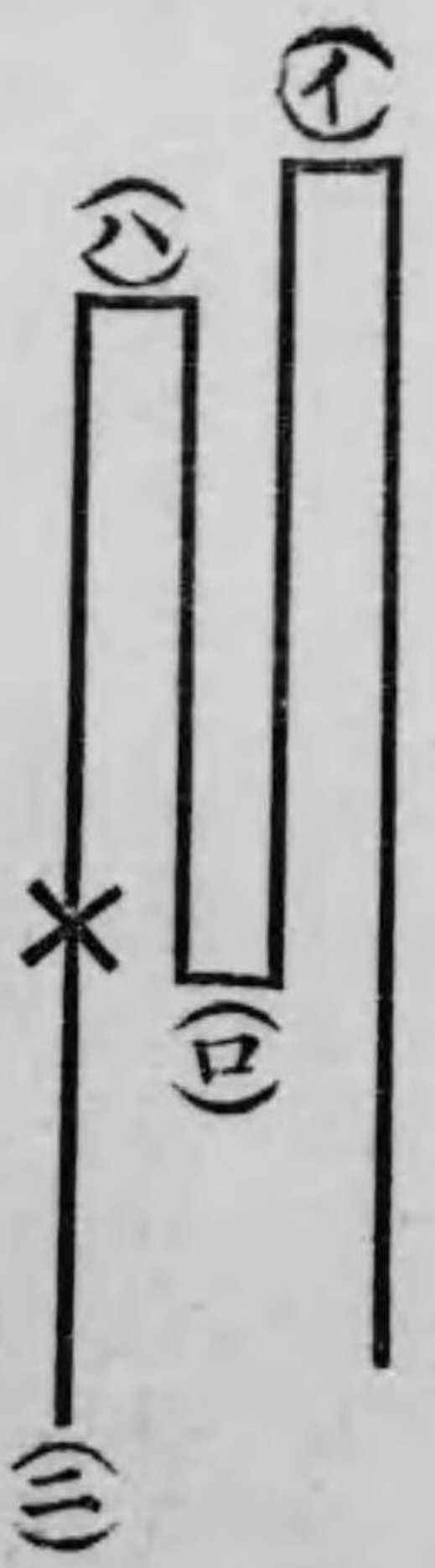
第三十二圖



第二十三圖は相場が下落した後ち(イ)より(ロ)に上進みしたが再び(ハ)と軟弱になつたが(イ)の底直を破らな

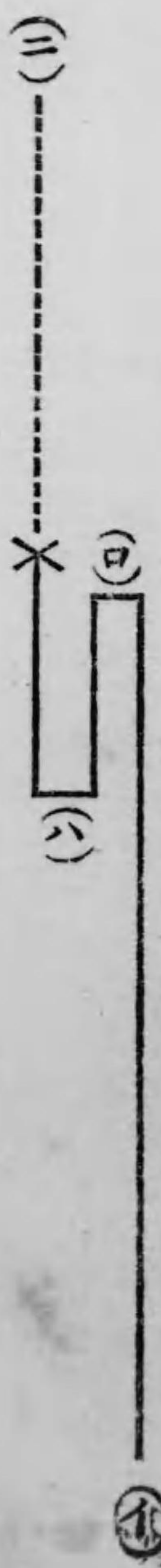
いで(ニ)に向つて昇進する中途の×印の邊にて買建つのである、即ち(イ)までは材料とか人氣其他の事情によつて下げたものが一の樂觀材料を得て(ロ)に上げ再び(ロ)より(ハ)に賣込まれたが、相場は既に材料丈け下げて來たのであるから(イ)の底直を下に廻らない、最早下げないと云ふ裏書を得た所が即×印のある邊である、此の所より買つたなれば心配なく利益を得るのである。

第四十二圖



第廿四圖は第廿五圖の反對にて相場が昇騰の後ち此の足取が出來たら×印の所より賣建つのである、買やの勢力が衰へ賣やの勢力が發揮せんとする瞬間である即ち相場の轉換を暗に示して居る。

第廿五圖



第二十五圖は(イ)より(ロ)に昇進したる直巾が比較的長くして中途に(ロ)より(ハ)と短かき屈曲し間もなく(ロ)の高直を上を廻れば透さず買建つのである、上げ材料によりて昇進したものが利入れとか新規賣りに賣込むなれど勢力が強いことを暗示して居る故に(ロ)の高直を抜きたる

×印の所より買へば必ず(ニ)に向つて昇進する態は既往の足取が充分證明して居る。

第二十六圖



第二十六圖は前圖の反對×印から賣り建てば宜い、二十五、六兩圖とも(イ)より(ロ)の直巾長く(ロ)と(ハ)との直巾が極めて短いものでなければ不可能である、實地につき參照を乞ふ

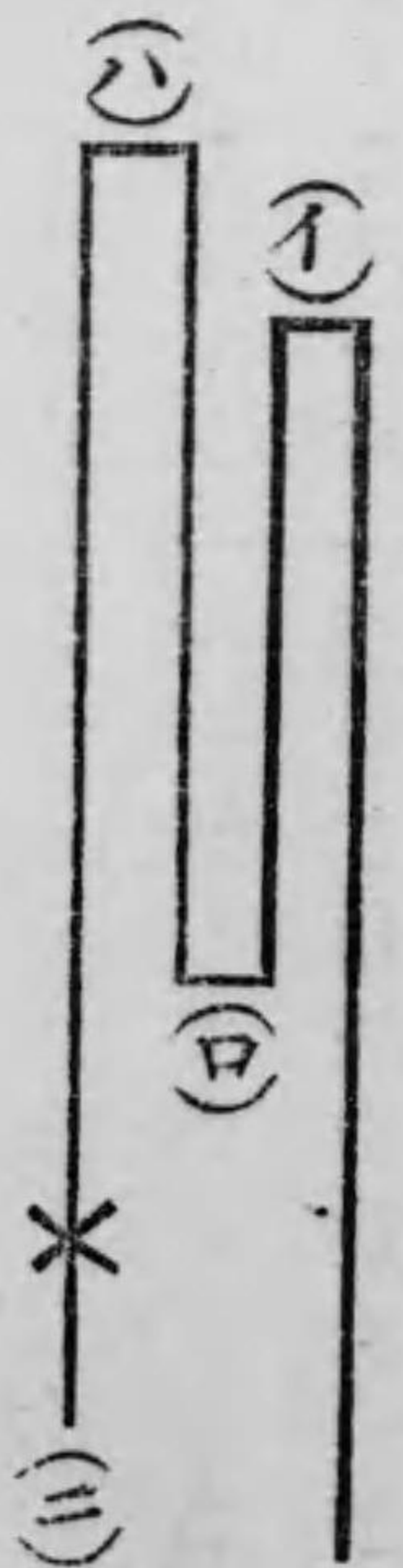
第七十二圖



第二十七圖は第三十二圖と小異にして(ハ)の賣勢力強く(イ)の底直を下廻り

し後ち(ニ)に向つて昇進した足取りである、かゝる場合は(ロ)の高直を何程か上に廻つた所より買へばよい。

第八十二圖



第二十八圖は第二十七圖の反對である即ち×印より賣ればよい。

以上圖解したる以外の足取りには一切賣買せざるを可とす、茲には變化の要所のみを示したのであるが中途の足取りに至つては賣買建玉あれば其儘とし、變化に際し初めて電光石火の間に氣を轉じ以て進退すべきである、次に足取は一圓足或は二圓五圓等種多あるが如何なる足取りにても同一の理法である事を記憶して實地に活用すべし。

第三十五章 大勢轉換觀破法

相場の高低は錯雜にして殆んど捕捉出來ざるの感あるも深く相場高下の理法を研鑽するときは眞に驚く計り秩序整然たるのである偶には常規を脱する變則相場出現することはあるも恁は極めて稀である何分上か下かの二道にて而も辿るべき道は一方よりないのであるから冷かなる頭によつて相場高下の道程を研究するときは何人にも是れを豫測し得るのである。

現今の如き大高下の節も又た一昨大正三年以前の如き沈衰相場も軌道としては將に一定である、大なれば大なる波瀾を胎み小相場は小なる秩序を立て、一高一低して居るのである。

而してこの一高一低する相場の辿るべき方向を知るときは巨萬の富も難くはない、相當の資金と運命の一部を加ふるときは財界の巨魁となるも易々たるのである、凡て相場界により拭ふべからざる失敗の足

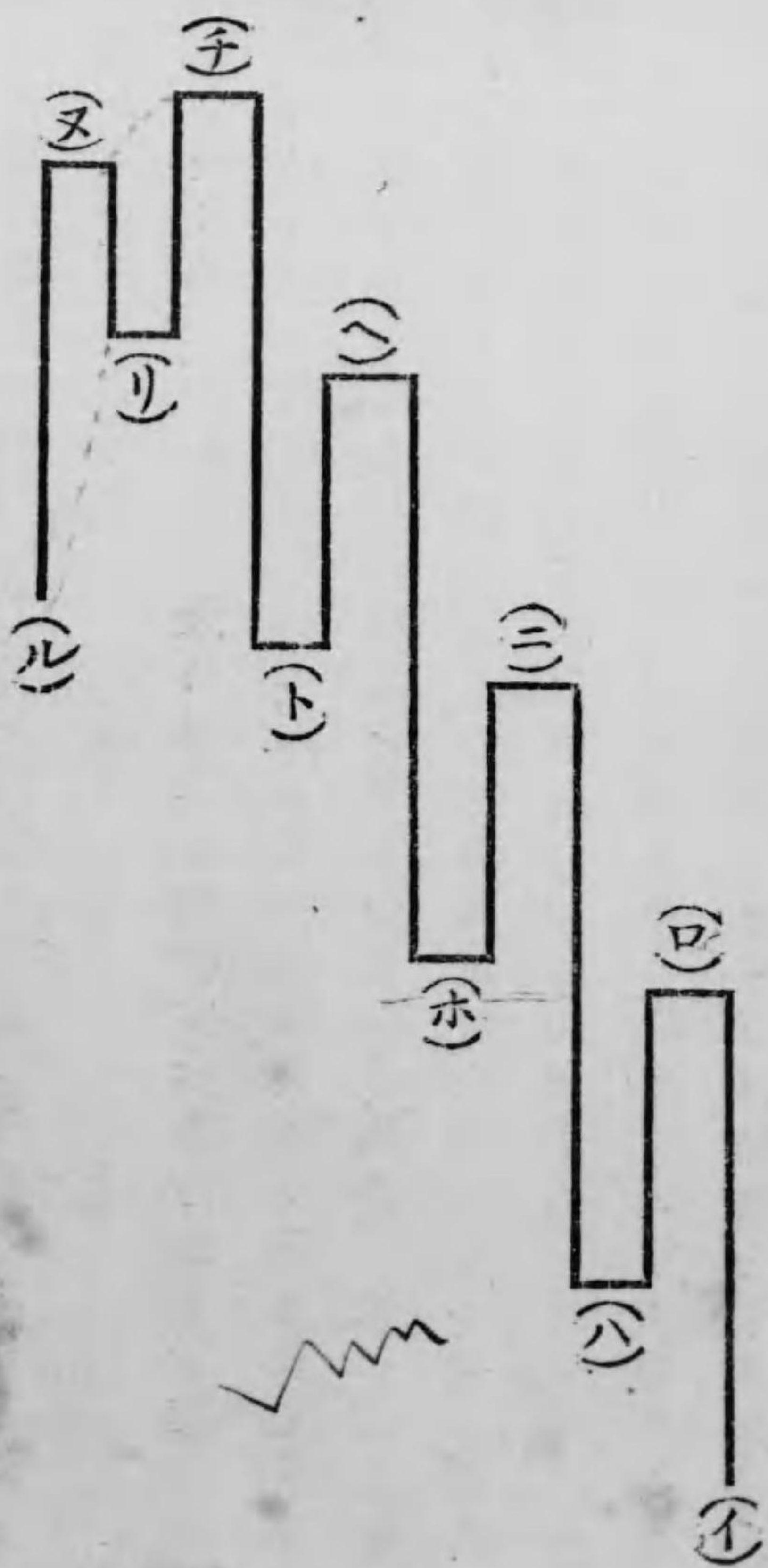
跡を印するも斯の相場の辿るべき方向を觀破し得ないからである予は多數の相場著書を公刊したが何れの書冊にも此の理法を説示して餘蘊がない。

されば今茲に述べんとする大勢轉換を觀破すべき方法と前葉とを並讀せば相場道の智識は盡し得る、而して相場の轉換を知るには一高低する高下足取を基礎として豫測を下すのである、前にも叙べたる如く高下する直段はすべて賣人買人の勢力人氣の表顯である、故に之れに含む所の潜勢力によつて將來を判斷し得るのである。

而して此の轉換は是非共知るべき必要中の必要に屬するのである、何んとなれば大勢上げ相場に轉換するときは下げ轉換を示す迄は絶対的買方針を持續し若し大勢下落したるものと觀破するや終始賣一貫を試み得るのである、是れのみならず不幸反對仕掛けしたるときは長

く引かれ追敷等の憂を視ざる中に見切り得る、洵に相場道の大切事項に属するのである、是が観破法を圖解説示せん。

第二十九圖 昇進相場の一例圖を示したのである。



此の法則はすべて過去の足取を標準として置くのである、たとへば前圖の(イ)より(ロ)まで昇進したる線を目標として置いて(ロ)より(ハ)に下押しするものを着目するのである。

すべて昇進大勢は押目の底直を終始着眼するので下落相場は戻り天井を之れ亦た着目して置くのである而して昇進相場が以前の高直を上抜きして押目に入つて押目底を演じ再び昇進するとも以前の高直に達し得ない即ち二十九圖の(チリヌ)の如きである、斯くの如く高直に達せずして(リ)の押目底を下に廻るときは相場轉換したる現象である

縦し(チ)の高直を抜き得たにせよ(リ)の底直を下に廻るときは相場の大いに準じて下落の歩調に入るのである、併し大高下の際は一圓内外の下直を見せるも速断は出来なない其後の足取にて(チリヌル)の状態を示した安心の場所より賣方針を採ればよい、上圖の如く(ハ)(ホ)(ト)等の如く

下押し状態を示すも以前の底直を破らざる限りは漫りに賣方針を採つては不可能である、右に反し下落相場は丁度之れを反對に活應用すればよい、既に如上各項に涉りて相場賣買必勝につきあらゆる方法を説き去り説き來つたのである是れより株式界に對し聊か心得置くべき事のみを列擧せん。

第三十六章 配當増減と相場の注意

前にも述べたる如く會社配當によつて相場に一高一低すべき材料たる事は既に理解した所なるが尙ほ注意すべき事項を述べんに、すべて決算期になると彼の會社は成績優良にて何分増しの配當あるなど、之れを肴に市場にては買進むのである増配當は好材料なれど充分此の原因を調査すべき必要がある唯だ何分増など、單純なる材料にては買思惑を試むるは甚だ危険である。

株式相場の原則としては成績優良にて努めて増配當をしない株券に買の妙味ある事は已に述べたる所である會社の成績が良好にて増配當をなす位であつたならば必ずしも決算期に入る迄には相場の上には顯はれて居るのである、若し増配當によつて相場が昇騰を見るときは相場も買進まれ従つて相場が昇進するならんも既に上進みしたる上の昇進なれば日ならずして下落に入るものである殊に裏面の怪しい會社株には無理にも縮配當をなし市價を維持し或は相場釣り上げ策を講じて密かに賣抜けんとなすの駆引は多くあるの例なれば唯だ單に配當の増減を標準として投資するは頗る危険である。常に是等材料によつて賣買を試みんとするには油斷なく調査し四圍の事情を綜合して臨機應變の進退を測るべきである。

第三十七章 株式賣買の商律

株式相場に輸贏を争はんと欲する幾十萬の人士は皆な一攫萬金の目的を懷き從事して居る事は論ずる迄もない併し一舉百萬の富を得んとするは最後の目的にて此の目的までには雨に風に道中種々なる困難に堪へ忍ぶ覺悟を要するは論を俟たない今茲に斯道の修養たる商律を列舉せんに

- 一、相場に従事せんとするものは須らく大膽にして小心でなければならぬ即ち希望は飽迄大にして凡て周到細密でなくてはならぬ。
- 一、凡そ素人は相場のヒカレ腰に強く利乘には弱きが須らく此の反對に利得は飽くまで多くし損は小にすべきである。
- 一、すべて何事にも注意に注意を重ね用心に用心をして相場に従事な

すも十中八九は損失々敗に終るのであるから冷靜なる判断と是れが豫想を下し得る丈けの理義を研究して賣買すべきである。

- 一、又た定期賣買を試みんとするには先づ資本の高を定め而して是れを損失するも妻子離散等の憂き目を見ないやう豫め講じて資本を下さねばならぬ唯だ其時の出來心にて再々無暗矢鱈に手出しする事は大の禁物である。

一、すべて相場に未練を残す事は甚だよくない不幸にして反對に仕掛けたるときは冷靜なる頭によつて不勝の地と見れば斷乎たる決心の下に見切りを付け次ぎの機會を待つことにせねばならぬ。

如上の如く商法の律としては至極平凡であるが此の平々凡々たる中に千載不朽の教訓が含まれて居るのである是等の事を一々列舉する時は能く大冊子をなし得るが相場必勝律たる其根本は大抵右に列舉